

余部遺跡(その2)発掘調査概要・II

—府営美原北余部住宅建て替え工事(第2期)に伴う発掘調査—



鉄鍋の鋳型

1999・3

大阪府教育委員会



はしがき

余部遺跡は、南河内郡美原町北余部及び南余部に所在する鎌倉時代を中心とした集落跡であります。本遺跡は、西側に接する堺市の日置荘遺跡とは、現在行政区域は異なっていますが、本来同一の遺跡であったと考えられ、東西約1.7km、南北約1.8kmの広大な範囲に及んでいます。

さて、大阪府教育委員会では、府営美原北余部住宅の建て替えに伴い、昨年度に統いて今年度も8月から発掘調査を実施してきました。その結果、近畿ではめずらしい古墳時代後期から飛鳥時代にかけての畠の敵溝が広範囲に検出され、それらを営んだ集落も同時に発見されました。中世においては鉄造に関連する遺構が、建物の周辺や鉄造土坑を中心に検出されています。これらの遺構は、昨年度の調査でも発見されており、鉄造関連の遺構の範囲がより明確になりました。また、近畿自動車道建設に伴う日置荘遺跡や太井遺跡、真福寺遺跡などの調査で、鉄造に関連する遺構、遺物が大量に出土しており、当地周辺がまぎれもなく河内丹南地域を本拠地とした河内鉄物師集団の職住拠点であったと考えられます。これらのことは、本地域の歴史にとどまらず、日本の古代～中世史を解明していく上でかけがえのない重要な資料になるものと確信されます。

本調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なるご理解とご協力によって進めることができましたことに、深く感謝の意を表します。今後とも本府文化財保護行政に対して一層のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成11年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 鹿野 一美

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会文化財保護課が、大阪府建築都市部より依頼を受けて平成10年度に実施した南河内郡美原町北余部所在、余部遺跡（その2）の府営美原北余部住宅建て替え工事（第2期）に伴う発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師 上林史郎を担当者として実施し、平成10年8月1日に着手し、平成11年3月31日に終了した。
3. 調査の実施にあたっては、大阪府建築都市部住宅整備課、美原町教育委員会の他、府営美原北余部住宅の方々をはじめとする地元関係者などから多大な協力と援助を受けた。記して感謝の意を表したい。
4. 本書で使用した方位は座標北を示し、標高はすべてT.P.（東京湾標準潮位）表示値である。また、遺構番号は6桁で表示しているが、頭の数字98は、1998年度を示している。
5. 本書の執筆・編集については上林があたったが、技師 地村邦夫の助力があった。

目 次

表紙カット 鉄鍋の鉄型

はしがき

例 言

本 文 目 次

第1章 調査にいたる契機と経過.....	1
第2章 調査の方法.....	4
第3章 余部遺跡とその周辺.....	5
第4章 調査の成果.....	8
第1節 基本層序及び遺構面の概略.....	8
第2節 古墳～飛鳥・奈良時代の遺構と遺物.....	15
第3節 平安～室町時代の遺構と遺物.....	20
第5章 まとめ.....	44

表 目 次

tab. 1 既往の調査と今年度の調査

挿 図 目 次

- fig. 1 既往の調査区と今年度調査区 ($S = 1/3,000$)
- fig. 2 余部遺跡の地区割り図
- fig. 3 余部遺跡周辺遺跡分布図 ($S = 1/25,000$) 國土地理院複製図による
- fig. 4 余部遺跡周辺地形図 (大日本帝国陸地測量部 明治18年測量)
- fig. 5 A・B 調査区各壁断面図 (水平方向 $S = 1/200$, 垂直方向 $S = 1/40$)
- fig. 6 A・B 調査区遺構配置図 ($S = 1/300$)
- fig. 7 C 1～C 3 調査区遺構配置図 ($S = 1/300$)
- fig. 8 掘立柱建物985011平面図・断面図 ($S = 1/60$)
- fig. 9 掘立柱建物985013平面図・断面図 ($S = 1/60$)
- fig. 10 古墳時代後期～飛鳥時代の竪溝群 ($S = 1/100$)
- fig. 11 古墳～奈良時代の遺物 ($S = 1/3$)
- fig. 12 掘立柱建物985001平面図・断面図 ($S = 1/40$)
- fig. 13 掘立柱建物985002平面図・断面図 ($S = 1/80$)
- fig. 14 掘立柱建物985003平面図・断面図 ($S = 1/60$)
- fig. 15 掘立柱建物985004平面図・断面図 ($S = 1/60$)
- fig. 16 掘立柱建物985005平面図・断面図 ($S = 1/40$)
- fig. 17 掘立柱建物985010平面図・断面図 ($S = 1/80$)

- fig.18 掘立柱建物985012平面図・断面図 (S=1/40)
 fig.19 掘立柱建物985009平面図・断面図 (S=1/60)
 fig.20 井戸980139平面図・立面図 (S=1/10)
 fig.21 井戸980444及び井戸980445平面図・立面図 (S=1/20)
 fig.22 井戸981350平面図・断面図 (S=1/20)
 fig.23 土坑980005平面図・断面図 (S=1/20)
 fig.24 土坑980011平面図・断面図 (S=1/20)
 fig.25 土坑980165平面図・断面図・立面図 (S=1/20)
 fig.26 土坑980001平面図・断面図 (S=1/10)
 fig.27 溝980017遺物出土状況図 (S=1/20)
 fig.28 上坑980201平面図・立面図・断面図 (S=1/10)
 fig.29 井戸980140他出土遺物 (S=1/3)
 fig.30 井戸980139出土遺物① (S=1/3)
 fig.31 井戸980139出土遺物② (S=1/3)
 fig.32 井戸980004他出土遺物 (S=1/3)
 fig.33 上坑980165出土遺物 (S=1/3)
 fig.34 土坑980005出土遺物 (S=1/3)
 fig.35 土坑980001出土遺物 (S=1/3)
 fig.36 土坑980201他出土遺物 (S=1/3)

図版目次

- PLATE 余部遺跡垂直写真 (平成9、10年度調査区を合成。上が北)
- PL. 1 遺構① A調査区全景 (南から) A調査区全景 (東から)
 A調査区 故溝群 (北から)
- PL. 2 遺構② B調査区全景 (南から) B調査区 建物985013 (南から)
 B調査区 建物985011 (西から)
- PL. 3 遺構③ A調査区 建物985003、建物985004、建物985005 (南から)
 B調査区 建物985010 (北から)
 C 1 調査区 区画する溝 溝981001、溝981004 (西から)
- PL. 4 遺構④ A調査区 井戸980140 (南から) A調査区 井戸980139 (南から)
 A調査区 井戸980139 二段目 (南から)
- PL. 5 遺構⑤ A調査区 井戸980004上面 (北から) A調査区 井戸980165細部 (西から)
 C 3 調査区 井戸981350 (北東から)
- PL. 6 遺構⑥ A調査区 土坑980005 (南から) A調査区 土坑980001 (東から)
 A調査区 上坑980011 (南から)
- PL. 7 遺構⑦ A調査区 溝980017 (西から) A調査区 土坑980201 (西から)
 A調査区 井戸980004上面の青磁小皿 (北から)
- PL. 8 遺物① 井戸980139一括
- PL. 9 遺物② 29-1は井戸980140 34は土坑980005
 29-4, 29-5は土坑980077 36-6は土坑980134
- PL. 10 遺物③ 32は井戸980004 33は土坑980165 34-5は土坑980005

第1章 調査にいたる契機と経過 (fig. 1)

大阪府南河内郡美原町は、大阪市の中心部から東南へ約17kmと交通至便の地にある。近年では町内を縦横に走る国道309号線や近畿自動車道の開通によって益々交通は便利になっている。ただ、町内に鉄道が敷かれていなくて、人口の増加はあまりみられない。交通は、比較的最寄りである南海高野線初芝駅や北野田駅あるいは近鉄南大阪線河内松原駅までのバスの移動による通勤、通学になる。さて、鉄道敷設については逸話がある。かつて南海高野線が堺から美原方面に延伸されるという話が美原町にきた時、地元の古老らが鉄道がとおると町内の若者が大阪市内へ遊びにいったり、働きにいったりするため、地元で農業をするものがいなくなるという理由で断ったという。そのため、南海高野線の美原町への鉄道延伸は変更になり、現在あるように堺市から大阪狭山市方面にルートが変更されたという。

さて美原町域は東西約4.5km、南北約5.5kmのやや南北に細長い地形を呈し、面積は約13.2km²をはかる。周辺市町村と比べるとかなり狭い。西と西北は堺市、北は松原市、東北は羽曳野市、東南は富林市、南は大阪狭山市に接し、人口は平成11年3月現在で約38,240人を数える。町域の東南部には、羽曳野丘陵の西斜面を開発した東急不動産の大規模住宅団地「さつき野ニュータウン」やその南側には地場産業の木材を加工する大阪木材工場団地も誘致されている。

大阪府建築都市部では、府下の老朽化した木造住宅や簡易耐火住宅（築30～45年）を各地域において順次建替を実施している。ここに報告する府営美原北余部住宅もその一つである。第1期の住宅建替工事に伴う発掘調査は、平成6年度に（財）大阪府埋蔵文化財協会、平成7年度に（財）大阪文化財調査研究センターにより、約11,200m²が実施された。その結果、飛鳥時代の溝、鎌倉～室町時代の建物・墓・井戸・铸造土坑・溝などが発見され、河内铸物師集団の作業場と集落であると推定された。次に、第2期の住宅建替工事に伴う発掘調査は、平成9年度に大阪府教育委員会によって敷地内の南側部分約7,560m²が実施され、鎌倉時代に属する一辺50m以上の区画溝で囲まれた屋敷地と、その西側に展開する铸造工房群が発見され、河内铸物師集団の実態解明に大きな成果が得られた。この調査によって、建替1期工事で検出された中世の遺構の広がりが北東側にも濃厚に及んでいることが確認された。それをうけて今年度の調査区は、平成9年度調査区の北側と、南側の細切れ部分を対象として、計約7,000m²にわたり発掘調査を実施した。ただ、新規府営住宅の本体工事の工程上、万能塙で囲まれた北側のA・B調査区（約5,700m²）を、年内に埋め戻しも含めて完了しなければならないため、調査を急がなければならなかった。また、当初、遺構密度が希薄であると考えられていたA・B調査区で、調査を進めるうちに昨年度同様中世の铸造関係の遺構が濃密に検出されるにいたった。その上、近畿ではめずらしい古墳後期から飛鳥時代にかけての窯の畝溝が、新たに検出され、それらを営んでいた集落も小規模ではあるが、同時に発見された。そのため、年末までの調査期間をにらみながらの懇たらしい調査となった。さらにA・B調査区の発掘調査成果を一般に対して公表しなければならないため、本

遺跡の現地説明会を平成10年12月19日（土）に実施した。師走にもかかわらず、好天にも恵まれ、見学者は約250人を数えた。その後、調査担当者は平成11年3月6日（土）に大阪府下埋蔵文化財研究会で「余部遺跡の中世集落とその周辺」という題目で発表した。

結局、A・B地区の埋め戻しの完了は、種々の理由で平成11年1月中旬まで延びた。その後、発掘調査は、万能堺の南側であるC1～C3地区（約1,300m²）に移り、昨年度検出された飛鳥時代の溝や、鎌倉時代の大規模な区画溝の続きが検出された。それ以外では、新たに木棺墓2基が発見された。その後、平成11年3月25日までに全ての調査区の埋め戻しや後片付けが完了し、住宅整備課に調査区を引き渡した。延べ8ヶ月に及ぶ調査期間中、人力掘削土量は合計2,300m³におよんだ。また、空中写真撮影もあわせて3回実施し7,000m²にわたる航空測量図を作成した。さらに、畠の畠溝埋土の植物遺体の同定や花粉分析もあわせて実施した。

今年度の調査で出土した遺物は、コンテナ約190箱を数え、昨年度分と合わせて約400箱となった。これらの出土遺物は、大部分は中世に属するが、井戸や土坑などからの一括遺物が多く、それらの整理成果や、2カ年にわたる発掘調査で検出された遺構の検討については、将来の正報告書の中で果たさなければならないであろう。さらに、近畿自動車道から今年度調査区までの南北約350m、東西約200mの範囲に大規模な中世の集落が展開しているものと考えられるが、それらも含めて検討されなければならないであろう。

調査年度	調査区名	原凶者	発支面積	調査機関	担当者	概要報告書等
昭和61年	近畿自動車道松原すまみ線及び府道松原泉大津線建設に伴う日置荘遺跡の試掘調査	日本道路公团 大阪府土木部		(財)大阪文化財センター		
昭和62年	近畿自動車道松原すまみ線及び府道松原泉大津線建設に伴う日置荘遺跡の発掘調査 I 調査区(A地区)	日本道路公团 大阪府土木部	9,100m ²	(財)大阪文化財センター	金光正裕 中村淳穂 他	『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財)大阪文化センター 1995.3
昭和62年 昭和63年	近畿自動車道松原すまみ線及び府道松原泉大津線建設に伴う日置荘遺跡の発掘調査 I 調査区(B地区)	日本道路公团 大阪府土木部	9,500m ²	(財)大阪文化財センター	金光正裕 中村淳穂 他	『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財)大阪文化センター 1995.3
昭和62年 昭和63年 平成元年 平成2年	近畿自動車道松原すまみ線及び府道松原泉大津線建設に伴う日置荘遺跡の発掘調査 I 調査区(C地区)	日本道路公团 大阪府土木部	6,530m ²	(財)大阪文化財センター	金光正裕 中村淳穂 村上生輝 他	『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財)大阪文化センター 1995.3
平成5年	府営北余部住宅建設(第1期)に伴う発掘調査(94)	大阪府建築部	3,630m ²	(財)大阪府埋蔵文化財協会	林日佐子	『余部遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター-1996.3
平成7年	府営北余部住宅建設(第1期)に伴う発掘調査(95)	大阪府建築部	7,700m ²	(財)大阪府文化財調査研究センター	亀井聰 奈加智美 寺川史郎	『余部遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター-1996.3
平成9年	府営北余部住宅建設(第2期)に伴う発掘調査(97)	大阪府建築部	7,560m ²	大阪府教育委員会	林日佐子 小浜成	『余部遺跡(その2)発掘調査概要I』大阪府教育委員会 1998.3
平成10年	府営北余部住宅建設(第2期)に伴う発掘調査(98)	大阪府建築 都市部	7,000m ²	大阪府教育委員会	上林史郎	『余部遺跡(その2)発掘調査概要II』大阪府教育委員会 1998.3

tab. 1 既往の調査と今年度の調査

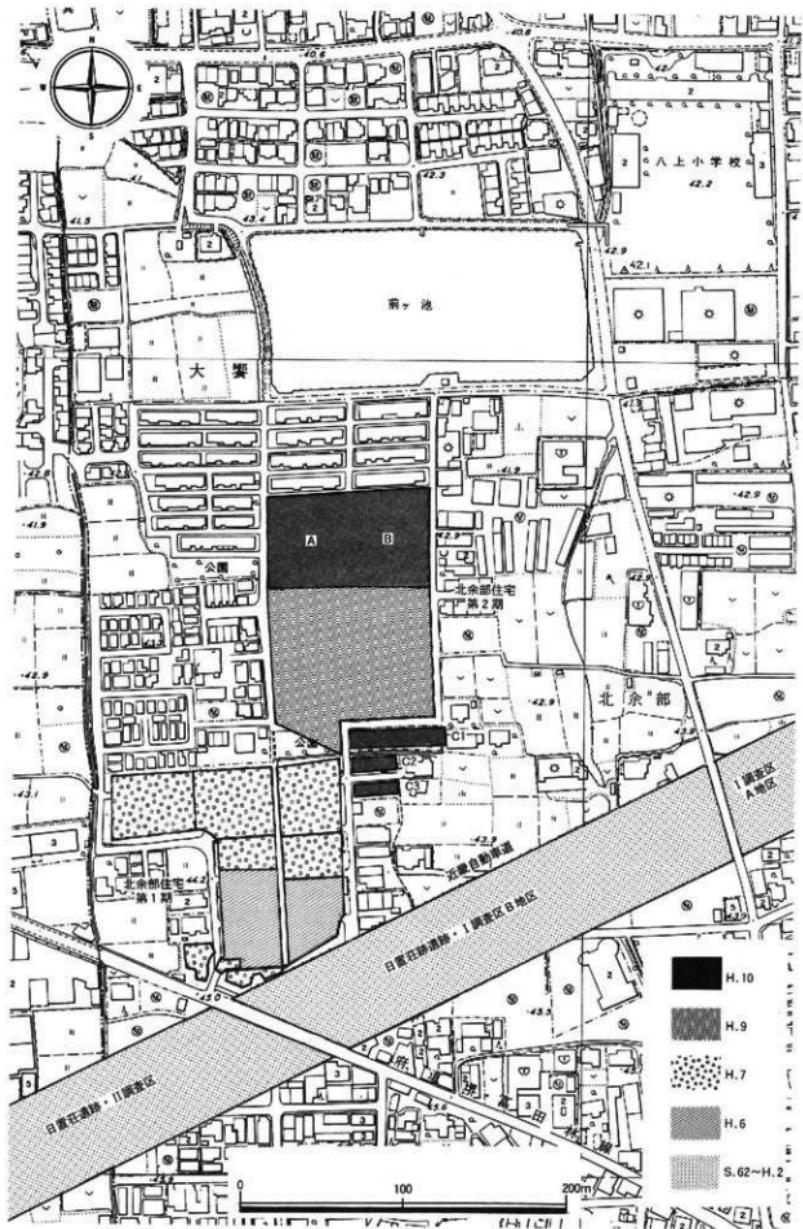


fig. 1 既往の調査区と今年度調査区 (S = 1/3,000)

第2章 調査の方法 (fig. 2)

今年度の調査区は、大阪府営美原北余部第2期住宅替敷地内の平成9年度（1997年度）調査区の北側部分（約5,700m²）と南側の細切れ部分の調査区（約1,300m²）を対象として、約7,000m²にわたり発掘調査を実施した。また、調査の便宜上、北側部分の万能塀で囲まれた調査区の西側をA調査区、東側をB調査区と呼称し、万能塀の南側、道路や水路で区画された調査区を北からC1～C3調査区と呼称している。調査区の地区割りは、国土座標の第VI系の座標値表示のものを使用し、大阪府内共通の地区割りを採用している。すなわち、大1区画（東西8km・南北6km単位）から大2区画（東西2km・南北1.5km単位）、大3区画（100mメッシュ）となり、大4区画で最小の10mメッシュになる。このように設定された杭は、実測用の基準線でもあり、また遺物の取り上げに際しての出土地区にもなる。また、遺物の取り上げに際しては、その地区的杭番号は北東角の杭番号によって代表させることにした。たとえば、本調査区の範囲は、杭番号E5-16-A16-i10、E5-16-A18-i1、E5-16-C16-h10、E5-16-C18-h1にあたる。

なお、方位については座標北、標高についてはT. P.（東京湾標準潮位）を使用した。土層及び土器の色調については、『新版 標準土色帳1988年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修のものを使用した。

本調査区で検出された各遺構は、検出順に6桁の番号を付しているが、昨年度調査との遺構番号の重複を避けるため、頭の数字に98を付し1998年度調査の遺構を表現している。また、遺構の性格のわかるものについては、漢字で番号の前にあらわした。たとえば、井戸980055という風になる。ただ、複数のピットで構成される掘立柱建物についてはそのかぎりではなく、新しく番号を振り直している。たとえば、掘立柱建物985001という風になる。以上のようにして調査を進めることになった。

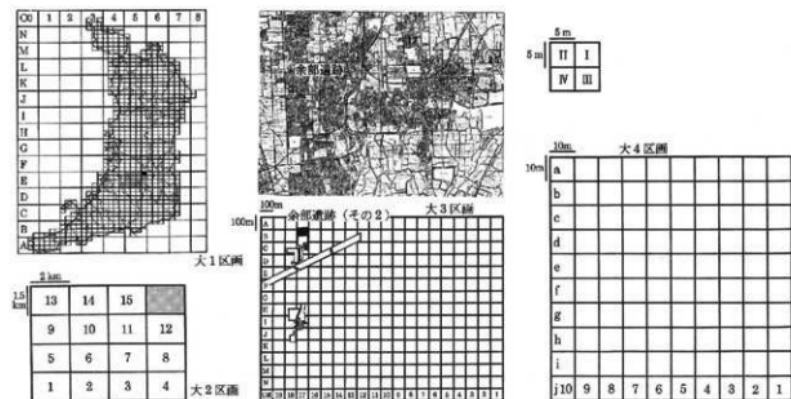


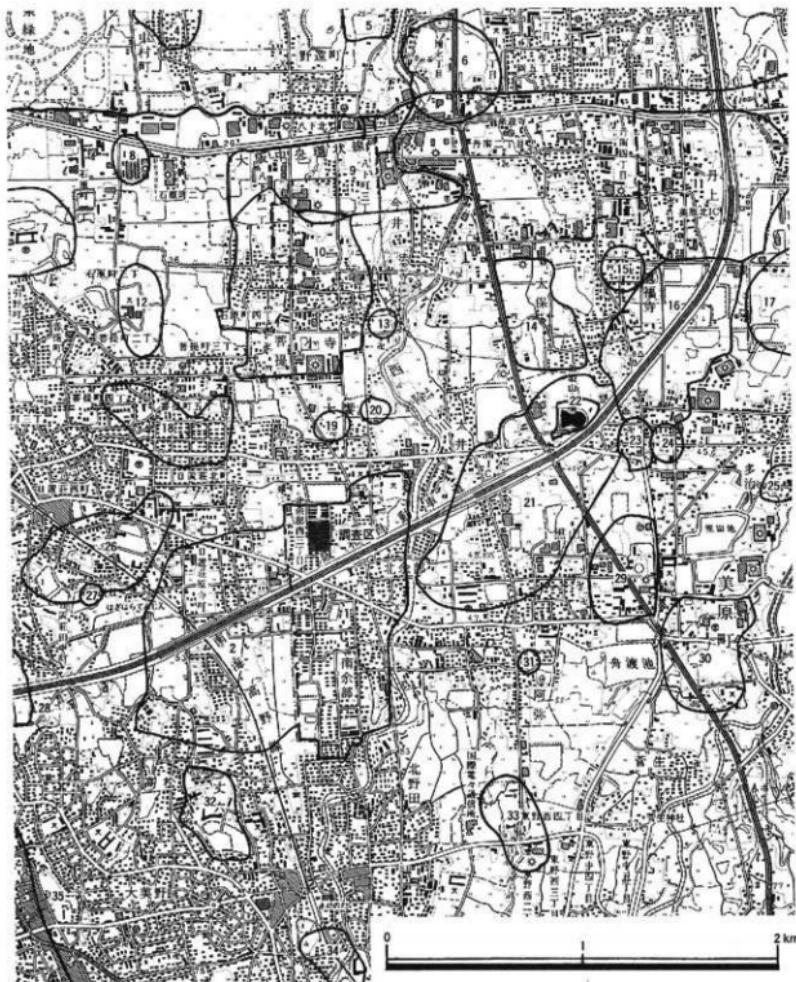
fig. 2 余部遺跡の地区割り図

第3章 余部遺跡とその周辺 (fig. 3, 4)

余部遺跡は、現在の行政区画でいえば、南河内郡美原町北余部及び南余部に所在する。ただ、その西側に展開する堺市日置荘遺跡とは、遺跡の内容からいっても同一の遺跡であり、さしづめ余部・日置荘遺跡として認識されなければならないものである。そうなれば、余部・日置荘遺跡は東西約1.7km、南北約1.8kmの広大な範囲に及んでいることになる。当遺跡は、地形的には和歌山県との府県境にある和泉山脈から北に伸びる羽曳野丘陵や陶器山丘陵とに挟まれた領域にあたり、狭山池から北へ流れる西除川西側の沖積地及び低位段丘面に立地している。

歴史的にみれば、弥生時代以前の遺跡ではなく、古墳時代になって多量の甲冑を副葬していた5世紀後葉の黒姫山古墳や、全国第5位の墳丘規模を誇る全長約335mの大型前方後円墳の河内大塚山古墳などが出現する。これらは全国屈指の巨大古墳群である、古市・百舌鳥古墳群のほぼ中間に位置している。また、西南部の陶器山丘陵には、全国最古最大の須恵器窯跡地帯である陶邑古窯跡群も存在する。さらに、飛鳥時代以降では、南北方向に伸びる難波大道、東西方向の大津道（長尾街道）や丹比道（竹内街道）などの大和と難波を結ぶ「古代の国道」沿いにも位置している。次に、奈良時代では42棟におよぶ大型掘立柱建物群が平尾遺跡で検出されている。この遺跡は、和銅元年に銅錢司長官に任命された多治比真人三宅麻呂の本貫地の一部か、もしくは丹比郡衙に比定されている。それ以外では、新羅系土器や銅を精練した鋳造遺構などが検出された太井遺跡、軒瓦が出土している黒山庵寺などがある。平安～室町時代では、梵鐘などの鋳造遺構が発見された真福寺遺跡、中世の「大保千軒」に比定される大保遺跡、南北朝の動乱期の城跡と考えられる大饗城跡、中世の集落である小寺遺跡などがある。また、荘園に目を転すれば、京都広隆寺の松原荘、浄金剛院領の大富荘、興福寺領である日置荘、石清水八幡宮領の田井荘などが文献にみえる。当遺跡は日置荘の領域にあたるものと考えられ、同様に、大富荘は「大保千軒」に、田井荘は太井遺跡や真福寺遺跡を含む領域にあたると推定されている。さらに、日置荘は文献にみえる「日置荘鉄物師」の故地とも考えられ、当地周辺が深く鋳造に関連した地域であったことが文献からもうかがえる。近畿自動車道建設に先立つ調査によって、真福寺遺跡からは鋳造に必要な白炭窯が、太井遺跡からは銅の精練にともなう鋳造遺構が検出されている。共に奈良時代のものであるが、この時点で中世に最盛期をむかえる河内鉄物師の片鱗を垣間見ることができよう。おそらく、当地周辺が、鋳造品の仕上がりを左右する良質な土や砂などを容易に採取できただためであろう。なお、真福寺遺跡では鎌倉時代前期の建物と共に、数基の鋳造土坑が見つかっており、その一部で梵鐘を鋳造していたことが判明している。

中世において、全国各地に展開する河内鉄物師の足跡は、香川県長勝寺の建治元年(1275年)の大工河内国丹南郡黒山郷下村住人の平久末や滋賀県金剛輪寺の乾元2年(1303年)の大工河内国丹南郡黒山郷の河内助安などの梵鐘銘によってうかがい知ることができる。当地周辺は、まさしく河内鉄物師の本拠地であった。



- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 余部遺跡 | 10. 小寺遺跡 | 19. 城岸寺城跡 | 28. 日置莊西町窯跡 |
| 2. 日置莊遺跡 | 11. 丹上遺跡 | 20. 八坂神社遺跡 | 29. 黒山遺跡 |
| 3. 竹内街道（丹比道） | 12. 石原町遺跡 | 21. 太井遺跡 | 30. 平尾遺跡 |
| 4. 中村町遺跡 | 13. 長和寺跡 | 22. 黒姫山古墳 | 31. 阿弥陀寺跡塚 |
| 5. 河合遺跡 | 14. 大保遺跡 | 23. 黒山庵寺 | 32. 丈六大池遺跡 |
| 6. 清堂遺跡 | 15. 真福寺跡 | 24. 丹比神社遺跡 | 33. 北野田遺跡 |
| 7. 金岡遺跡 | 16. 真福寺遺跡 | 25. 丹比庵寺跡 | 34. 野田城跡 |
| 8. 石原町北遺跡 | 17. 郡戸遺跡 | 26. 日置莊西町遺跡 | 35. 西高野街道 |
| 9. 八下遺跡 | 18. 日置莊北町遺跡 | 27. 新池古墳群 | |

fig. 3 余部遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000) 国土地理院複製図による

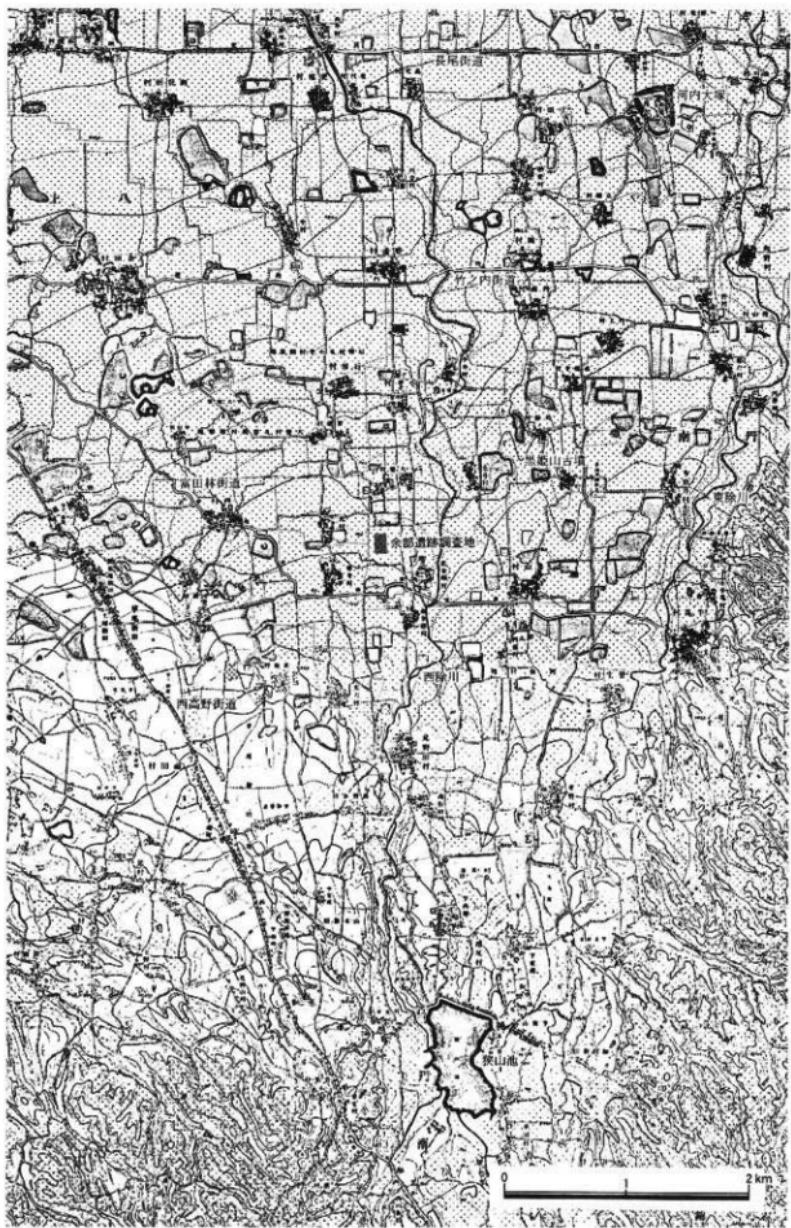


fig. 4 余部遺跡周辺地形図（大日本帝国陸地測量部 明治18年測量）

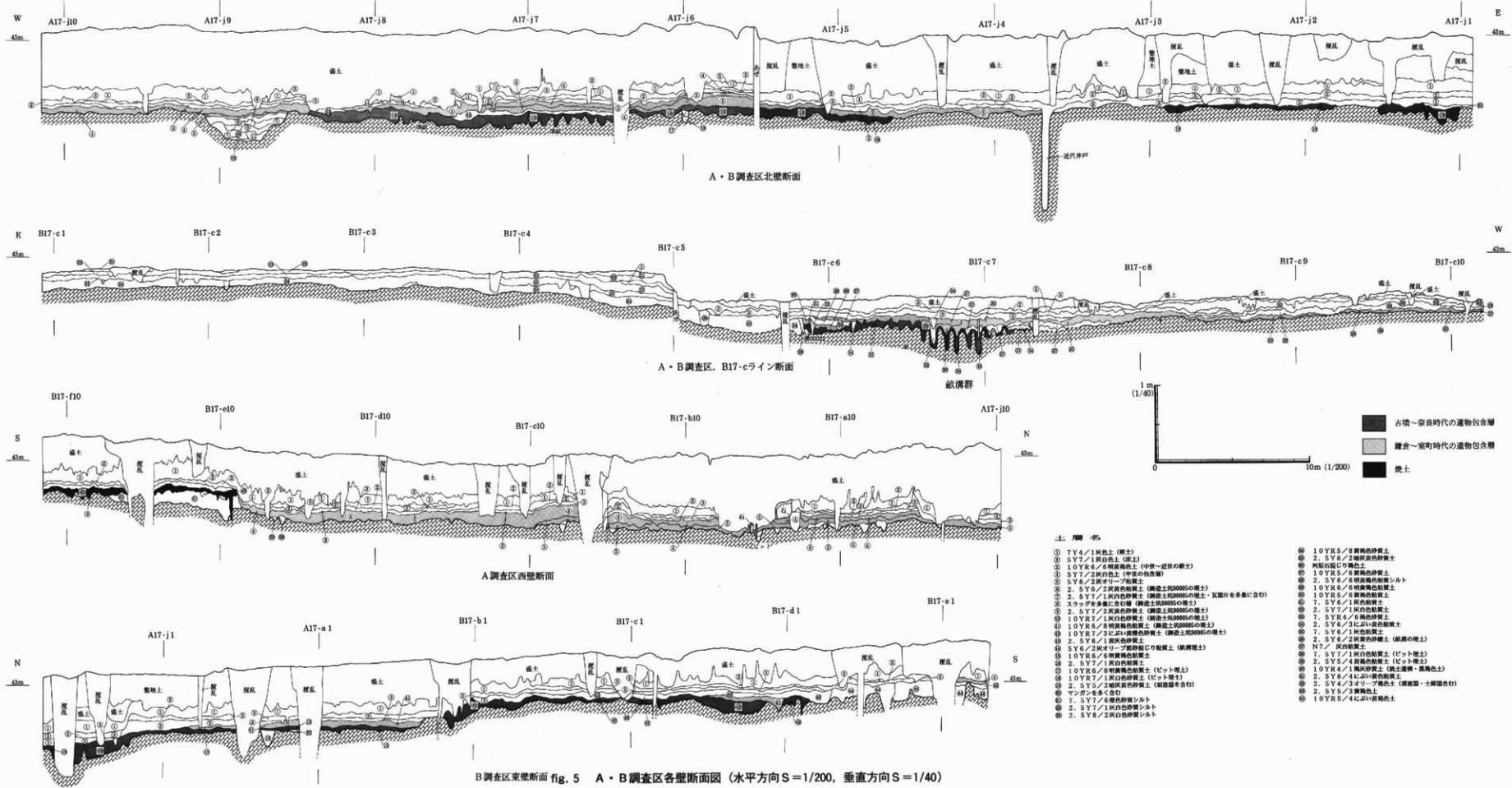
第4章 調査の成果

第1節 基本層序及び遺構面の概略 (fig. 5 ~ 7)

今年度の調査は、深掘り部分も含めて最大約2.5mまでの発掘調査を約7,000m²にわたって実施した。この間の土層は、盛土、種々の砂、砂質土、シルト、粘質土、粘土より形成されており、現場で作成した1/20の断面図を出来るかぎり採用して掲載した。

さて、刀能塚で囲まれた北側の調査区であるA・B調査区は、元来、東西約95m、南北約60m、面積約5,700m²の横に長い長方形を呈していた。ただ、調査の行程上、中央で二分し、西側をA調査区、東側をB調査区に分け、掘削を進めた。両調査区は、地形的にいえば、低位段丘の斜面及び沖積地上に立地している。なお、両調査区の層序はかなり異なっており、地形的にも地山の傾斜が南から北に下降している。畠の営まれていたA調査区北東部がもっとも低い。すなわち、東西断面をみると、畠を底面とする浅い皿形を呈している。また、地山面もA調査区が黄色系粘質土であるが、B調査区では段丘疊層になっている。

ここでは、両調査区の北壁断面、調査区のほぼ中央にあたるB17-cラインで設定した東西方向のあぜ断面、A調査区の西壁断面、B調査区の東壁断面を掲載したが、両調査区の層序を明確に表現しているのは、南北方向ではA調査区西壁断面、東西方向ではB17-cラインのあぜ断面であろう。基本的には上から府営住宅解体に伴う整地土・盛土が0.5~1m、①府営住宅建設前の耕土が0.1~0.15m、②床土が0.05mであり、その下には③近~中世の耕土0.1~0.15mが堆積している。また、その下層は、調査区全体に及んでいないが、中世の包含層である④灰白色土が約0.1mの厚みで堆積している。層内には、瓦器や土師器、土釜、陶磁器などの破片が含まれている。この層を除去すると遺構面が現われ、ほとんどの場合地山面になっている。ただ、古墳時代後期~飛鳥時代の畠付近の堆積だけは他と異なっている。すなわち、地山である黄色系粘質土を掘り凹めて畠溝を造成しているが、その埋土は⑤灰黄色砂礫土である。また、その上部には⑥灰色粘質土が堆積し、層内より少ないながらも古墳~奈良時代頃の須恵器片などが出土している。中世の包含層である④灰白色土が堆積しているのは、⑥灰色粘質土の上層になる。元来、畠付近は地山のレベルが低く、また粘土層で掘削が容易であったために畠が営まれたものと考えられ、その部分は飛鳥時代以降もレベルが低く、中世においても水が集まりやすい湿気の多い、深い谷筋にあたっていた。そういった場所は、居住には適さないし、鋳造場所としては最も敬遠されたであろう。鎌倉時代頃に畠上部がどのようなものであったかは明確ではない。下層に畠遺構があると想定したために、この部分の中世面を一気に掘削してしまったという危惧もあるが、B17-cラインのあぜ断面をみるとピットや土坑はみられない。中世において、畠付近には遺構が少ないので、湿潤な土地であったためであろう。ただ、その西側や東側には、多数の掘立柱建物、井戸、土坑、溝などが濃密に展開している。中世の人々は、住居や生業を営むにあたって、まずその土地の条件を十分に勘案していたことを検出された遺構や土層は物語っている。



B調査区東壁断面 fig. 5 A・B調査区各壁断面図（水平方向 S = 1/200, 垂直方向 S = 1/40）

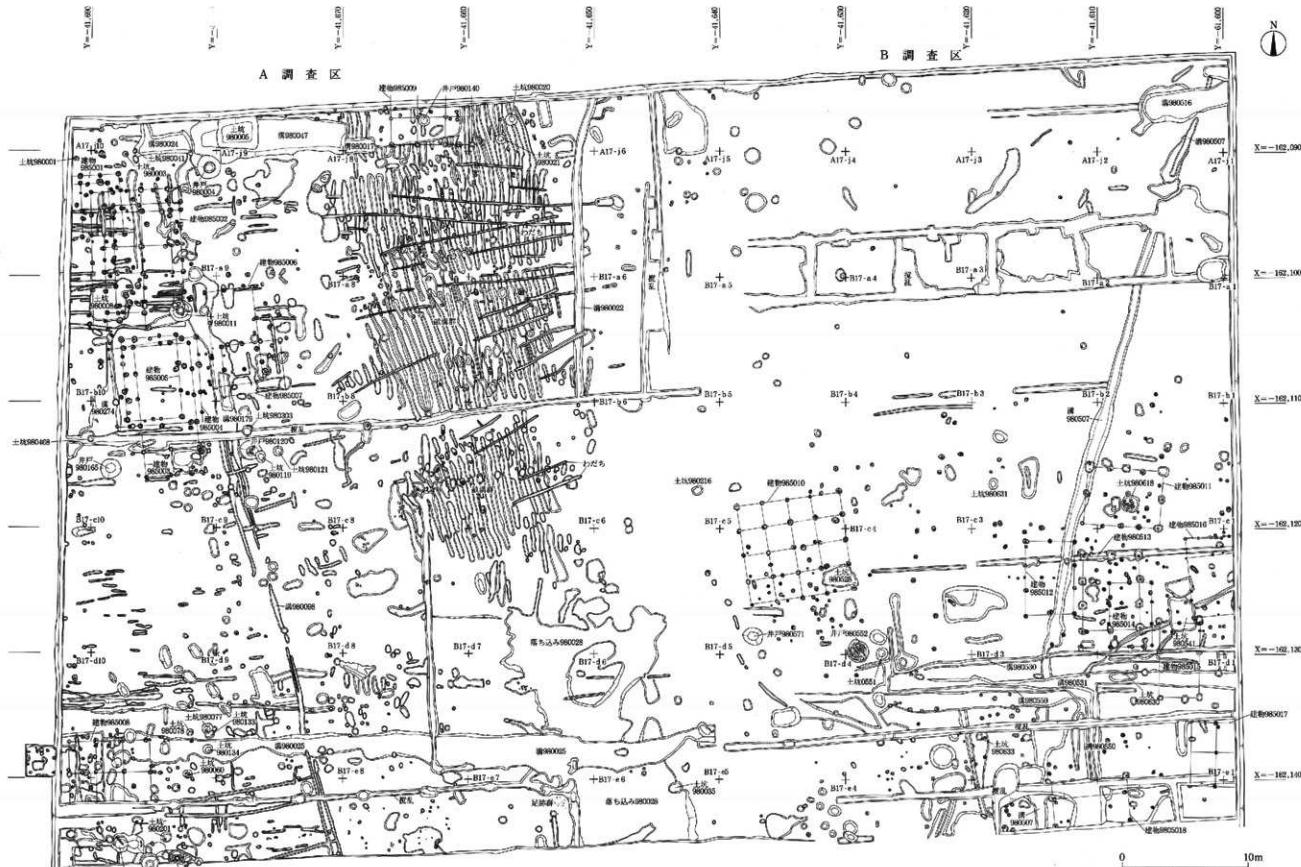


fig. 6 A・B調査区遺構配置図 (S=1/300)

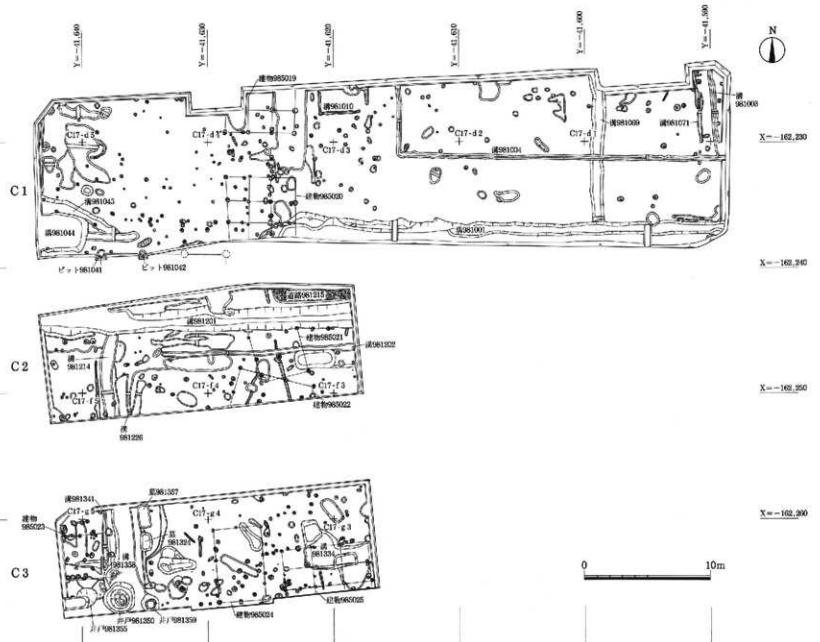


fig. 7 C 1 ~ C 3 調査区遺構配置図 (S = 1/300)

第2節 古墳～飛鳥・奈良時代の遺構と遺物 (fig. 8～11)

今年度の調査では、旧石器時代のナイフ形石器や繩紋～弥生時代の石鏃が出土しているが、それらに伴う土器や遺構はみられない。すでに削平されたのであろうか。それとも狩獵の場であったのであろうか。明確に遺構が現われるのは、古墳時代以降である。主要な遺構と遺物には、掘立柱建物・ピット・畠の畝溝群・わだち・牛などの足跡・土坑・溝、須恵器などがある。

(1) 掘立柱建物

①掘立柱建物985011 (fig. 8) B調査区のB17-c2付近で検出された。桁行4間、梁行2間の東西棟の建物で、その主軸はN87°Wをはかる。建物の規模は、桁行6.3m、梁行4.5m、面積約28m²をはかる。柱間は桁行1.5～1.8m、梁行2.2～2.4mをはかり、切妻屋根の建物と考えられる。柱穴の形態は円形、梢円形、隅丸方形と様々であり、規模も様々である。ただ、四隅の柱の規模は一辺0.8m前後と大きく、隅丸方形を呈していた。西側梁行の柱列は、南北方向の7世紀の溝980507によって切られている。本建物の時期は、明確ではないが、6世紀後葉頃を想定している。

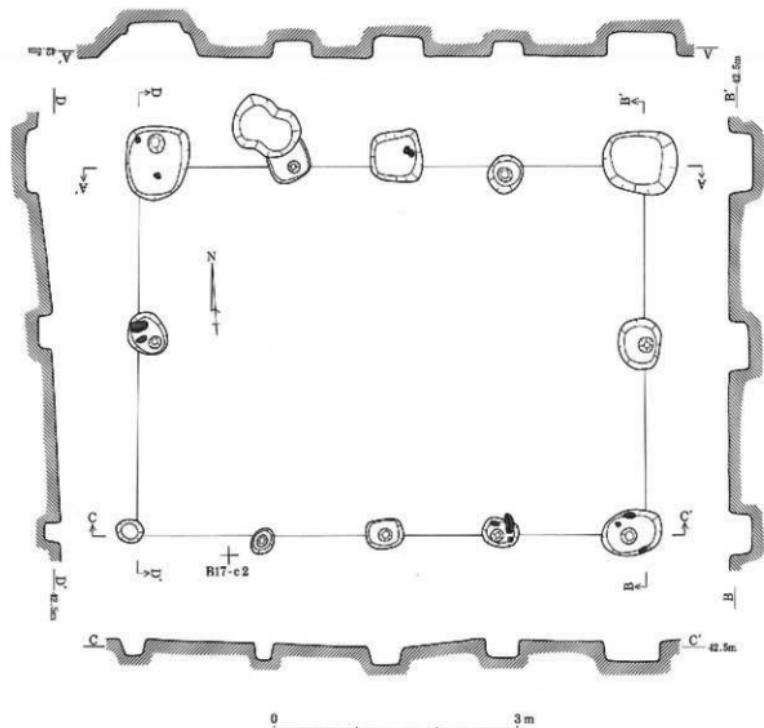


fig. 8 掘立柱建物985011平面図・断面図 (S=1/60)

②掘立柱建物985013 (fig. 9) B調査区のB17-d2付近で検出された。桁行3間、梁行2間の南北棟の建物で、その主軸はN1°Eとほとんど真北を示している。建物の規模は、桁行6.1m、梁行4.6m、面積約28m²をはかり、建物985011と同規模である。柱間は桁行2~2.1m、梁行2.2~2.4mをはかり、切妻屋根の建物と考えられる。柱穴の形態は隅丸方形が多く、規模は一辺0.6~0.7m、深さ0.15~0.3mをはかる。ただ、建物の東南部は鎌倉時代の建物985014によって切られ、北側梁行柱列の上面も、住宅造成時の埋管によって大きく削り込まれていた。なお、本建物の時期は建物985011同様、6世紀後葉頃を想定している。すなわち、建物985011と建物985013が2.5mの間隔をおき、西側柱列を一直線に揃える形でT字形に配置されていたものと考えたい。

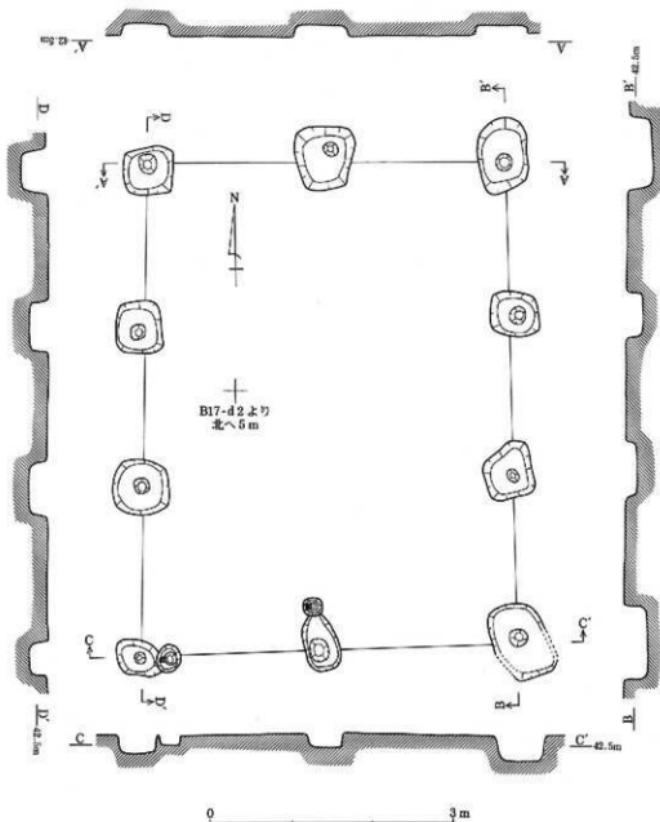


fig. 9 掘立柱建物985013平面図・断面図 (S=1/60)



fig.10 古墳時代後期～飛鳥時代の竪溝群 (S=1/100)

(2) 烟の畠溝群 (fig.10, 11) A調査区の北東半部を中心に大規模に検出された。畠溝群が営まれている範囲は、東西約20m、南北40m以上で、面積は800m²以上をはかる。その東端は南北方向の7世紀の溝980022によって区画されている。畠溝が検出された区域は、A・B調査区の中でも最も低く、東側のB調査区の建物985013付近とは0.9m、A調査区西南部の建物985008付近とは0.5mと高低差がある。烟畠の盛土は、後世の開発によって大部分が削平されていたが、一部の良好に遺存していた畠は幅0.4m、高さ0.1mの断面蒲鉾形を呈していた。また、各畠の規模は長いもので10m、短いもので3mをはかり、7m前後のものが最も多い。さらに、畠溝の幅は0.35m前後、深さ0.15m前後をはかり、その断面はU字形を呈していた。畠溝の方向は概略北側部分がN8°W、南側部分ではN20°Wをはかり、南と北で約12°の開きがある。これら畠の方向は、地形に制約され、斜面に直交する形で設定されたものと考えられる。畠溝の埋土は青白色系砂質土であり、層内からはfig.11-2に示したような6世紀後葉の須恵器杯身片が数点出土している。

(3) わだち (轍・fig.10) 上述した畠溝に直交する形で、細長い平行する小溝が8ヶ所以上で確認されている。これは、平行する小溝間が1.5m前後と均等であることから、牛などに牽かせた車のわだちの痕跡と考えられる。わだちの規模は、最長19m、幅0.2m前後、深さ0.1m前後をはかる。その埋土は、畠溝同様青白色系砂質土であり、すべて畠溝や南北方向の溝980022を切り込んでいた。ただ、わだちの埋土から遺物が出土していないため、時期については明確ではないが、上層に6～8世紀の遺物包含層があり、且つ、わだちがそれらの遺構をすべて切り込んでいることを勘案すれば、牛車などの活動時期は7～8世紀代と考えられる。

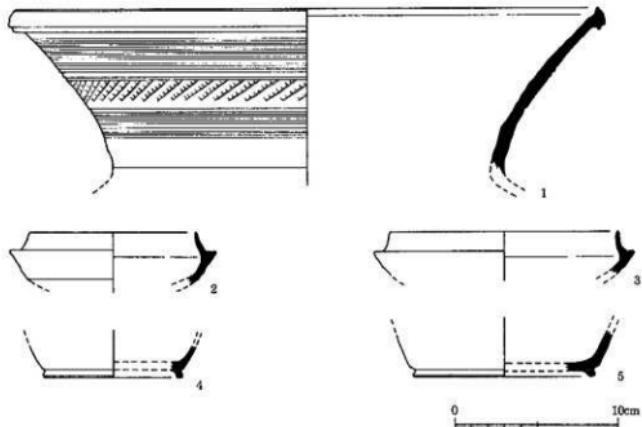


fig.11 古墳～奈良時代の遺物 (S=1/3)

第3節 平安～室町時代の遺構と遺物 (fig.12～36)

平安～室町時代の主要な遺構には、掘立柱建物・井戸・土坑・溝・土壙墓などがある。また、各遺構から出土した主要な遺物には、瓦器・土師器・土釜・土師質小皿・須恵質土器・陶磁器・瓦・柱根片・桶の底板、鋳造に関わる鉄鍋などの鋳型・鉄釘・鉄片・炉壁・鉄滓などがある。

(1) 掘立柱建物

調査区全体からは、鎌倉時代を中心とした掘立柱建物が20棟以上検出されている。

①掘立柱建物985001 (fig.12) A調査区の北西部、A17-j10付近で検出された。桁行2間以上、梁行2間の身舎に、東側と北側に廂の付く建物である。建物は調査区外にも及んでいるため、その全容は明確ではない。ただ、基本的には2間×3間の総柱建物であり、さらに北と東西に廂が付く三面廂の東西棟と考えられる。建物主軸はN87°Eで、ほぼ真東西を向いている。現状での建物の規模は、桁行3.7m以上、梁行4.9mをはかる。柱間は桁行が2.2m、梁行が2.1mをはかる。廂の柱列は、身舎から東へ約1m、北へ約0.7mと狭く、壁の張り出しの可能性がある。柱穴の形態は基本的には円形で身舎も廂も変わらないが、比較的隅柱の柱穴は大きい。柱穴の規模は、径0.3～0.45m、深さ0.15～0.45mをはかる。ピット980309・980317・980428には柱根が遺存していた。比較的残りの良かったピット980309の柱根は、径0.1m、長さ0.3mをはかるが、根元は腐食していた。また、廂の東柱列から0.5mのところに南北の細長い溝980012が伸びているが、雨落溝の可能性が高い。さらに、廂の北柱列から1.2mのところには土坑980001がある。この土坑は、浅い皿形を呈する小円穴であったが、土坑内に土師質小皿が18枚以上埋納されていた。おそらく、土坑980001は、本建物に伴う地鎮のための土坑であろう。本建物の時期は、出土遺物などから13世紀前葉頃と考えられる。

②掘立柱建物985002 (fig.13) A調査区の北西部、B17-a10付近で検出された。建物985001と一部重複している。建物の復元には検討を要するが、基本的には桁行3間、梁行2間の総柱の身舎に、北・西・南に孫廂、東側に廂の付く南北方向の大型建物と考えられる。建物主軸はN3°Wではば真北を向いている。建物の規模は桁行11m、梁行7m、面積約77m²をはかる。柱間は身舎が桁行2～2.6m、梁行2.3mをはかる。廂の柱列は、身舎から北へ0.5mと1.7m、西へ0.9mと1.9m、南へ0.5mと1.7m、東へ0.9m離れている。内側の廂は、南と北で0.5m、東と西で0.9mと狭く、壁の張り出しの可能性がある。屋根の形態は、廂の位置から寄棟造か、入母屋造と考えられる。各柱列の9ヶ所以上の柱穴には、人頭大の平坦な河原石が柱を安定させるために入れられていた。なお、東西方向のL柱列は柱穴も小さく、浅い。さらに、L柱列がD柱列とK柱列の中間に位置することから、L柱列は床の束柱であろう。すなわち、建物の中央に位置する東西柱列のD-K間は板間の可能性が高い。それ以外は土間なのであろうか。柱穴の形態は基本的に円形であり、身舎の方が大きめである。柱穴の規模は身舎が径0.4m前後、深さ0.4m前後であり、廂が径0.2～0.4m、深さ0.2m前後をはかる。また、本建物は西南部の土坑980008や東南部の上坑980011が埋まつた後に建てられている。なお、本建物の時期は、周辺の遺構から13世

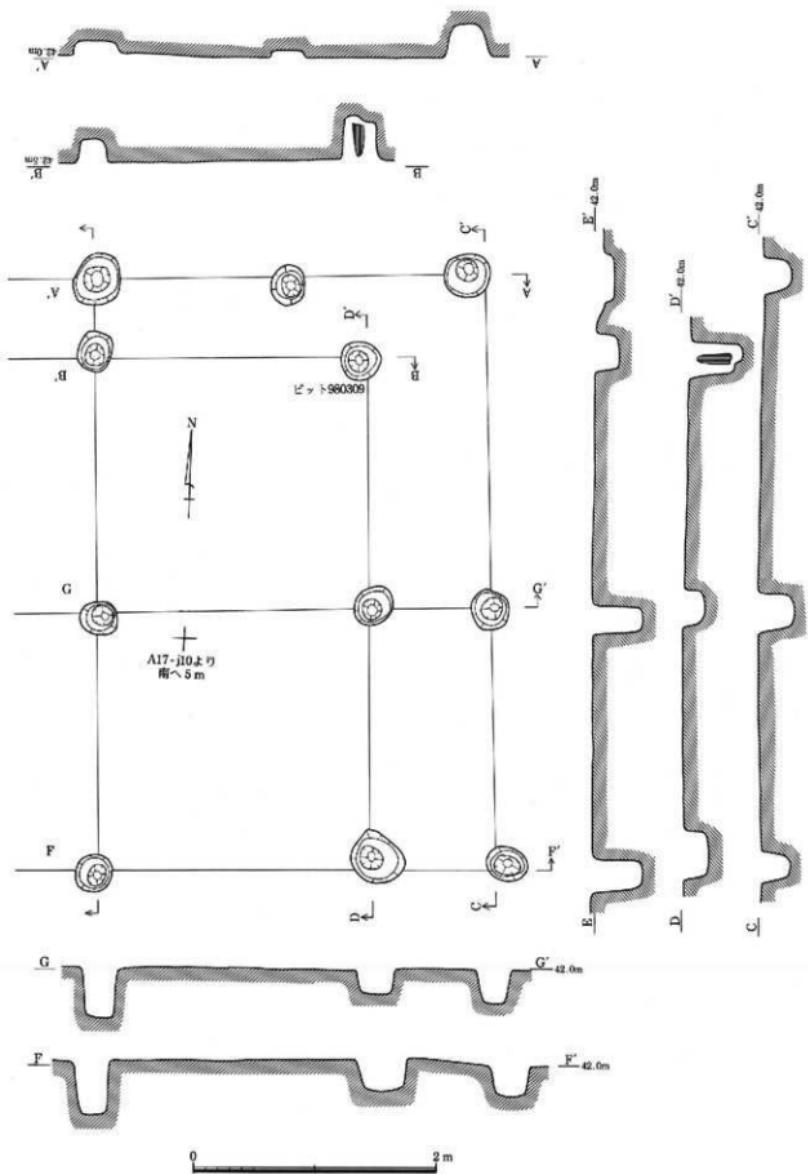


fig. 12 挖立柱建物985001平面図・断面図 (S = 1/40)

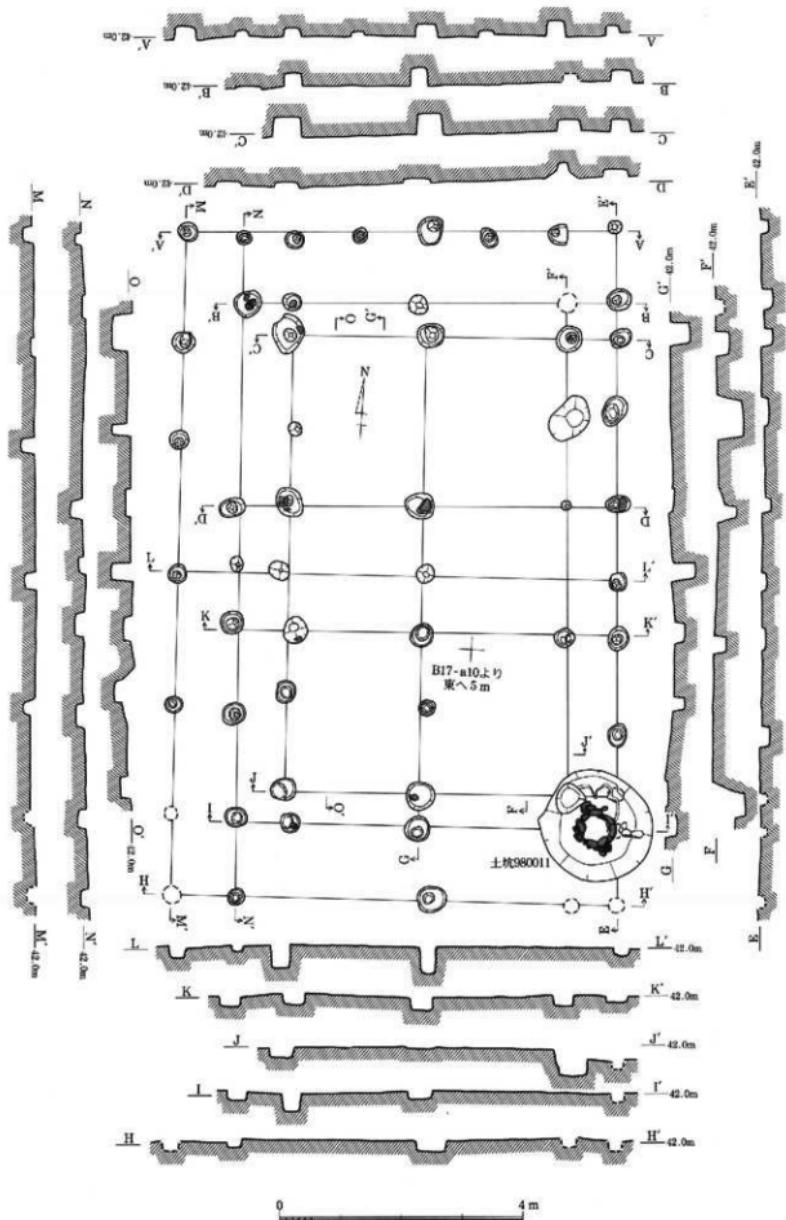


fig. 13 据立柱建物985002平面図・断面図 (S=1/80)

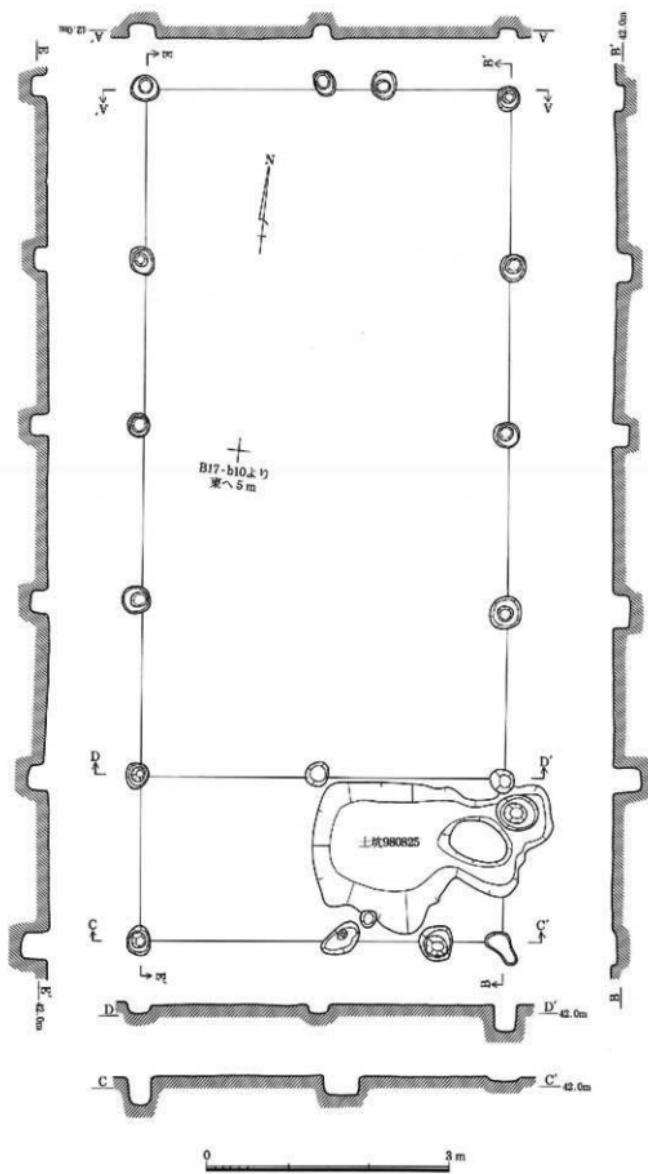


fig.14 据立柱建物985003平面図・断面図 ($S = 1/60$)

紀前葉頃と考えられるが、建物985001と比較すれば本建物の方が後出と考えたい。

③掘立柱建物985003 (fig.14) A調査区の北西部、B17-b10付近のはば同じ場所に3棟の建物985003～985005が重複して検出されている。おそらく、相次いで建築されたものと考えられる。

本建物は桁行5間、梁行2間の細長い南北棟である。建物主軸はN6°Wで、やや西に振っている。建物の規模は桁行10.5m、梁行4.5m、面積約47m²である。柱間は桁行が2.1～2.2m、梁行が2.2mをはかる。柱穴の形態は円形であり、その規模は径0.3m前後、深さ0.2～0.4mをはかる。

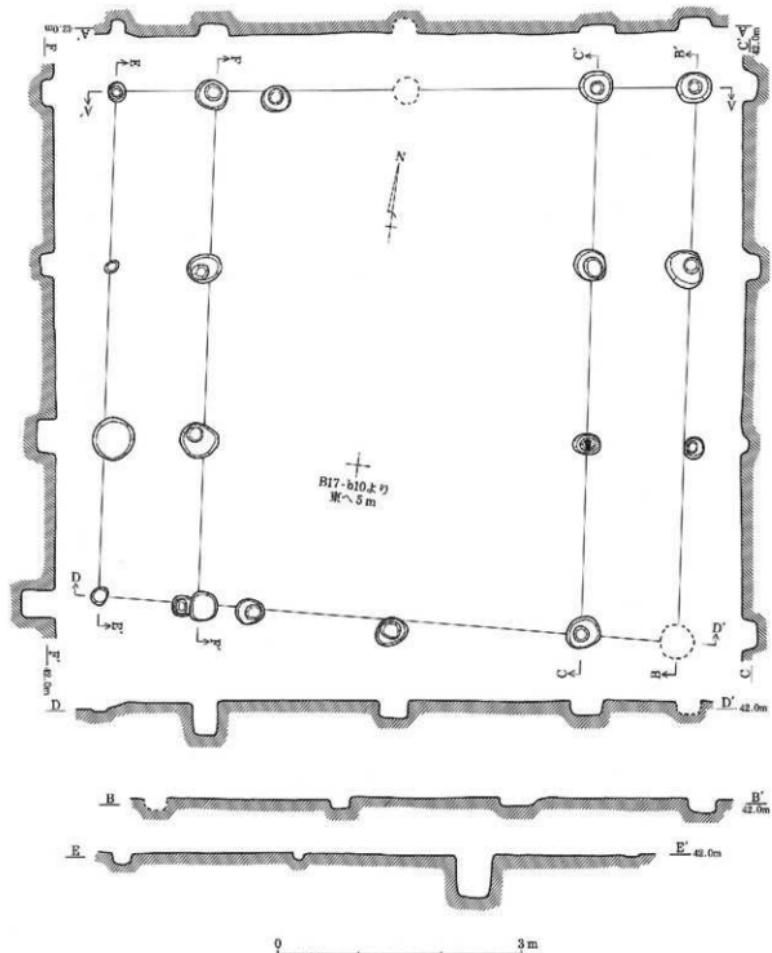


fig.15 掘立柱建物985004平面図・断面図 (S=1/60)

なお、本建物内の東西方向のD列は、間仕切りと考えられ、その東南部には長方形の土坑980168がある。建物内部の鋳造に関わる施設の可能性があろう。さらに、本建物を「コ」の字に取り囲む形で溝980274と溝980179がある。明らかに本建物を区画し、さらに用・排水の機能も備えている。

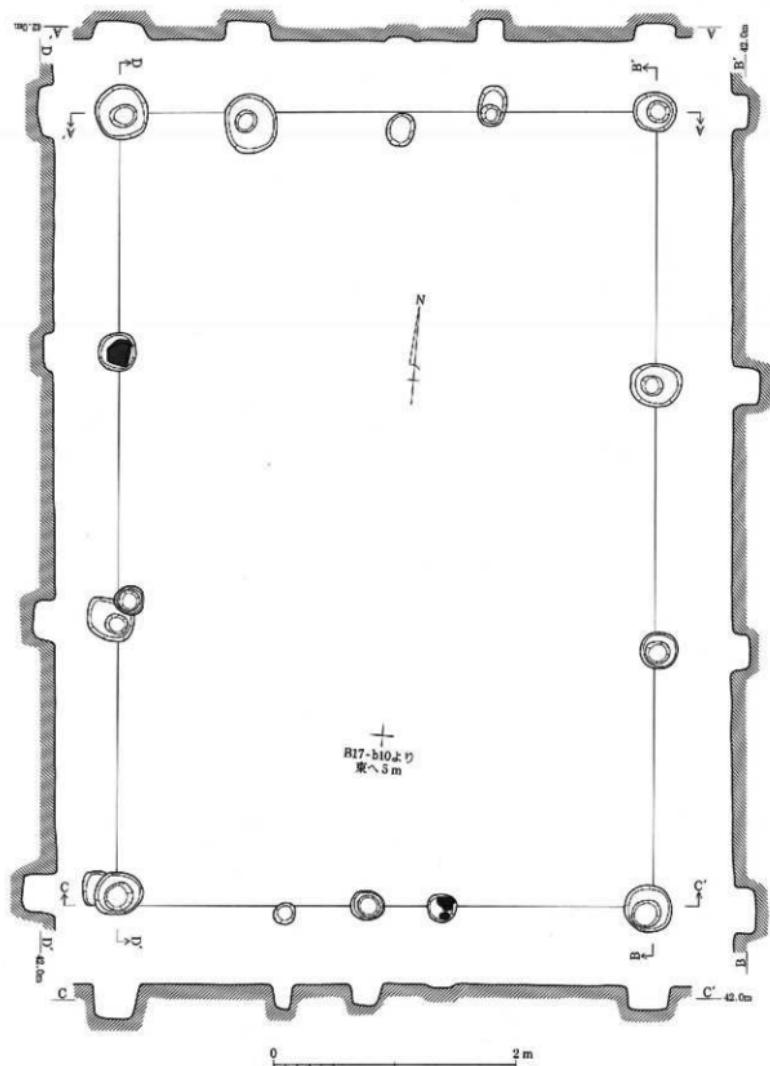


fig. 16 掘立柱建物985005平面図・断面図 (S=1/40)

たのである。本建物の時期は、周辺の遺構から13世紀前～中葉頃と想定される。

④掘立柱建物985004 (fig.15) A調査区の北西部、B17-b10付近で検出された。桁行3間、梁行2間の南北棟で、東西の両面に廂が付く。桁行の東列と西列では長さが異なり、平面的にいえば東を底とする台形状を呈している。建物主軸はN6°Wで、985003同様やや西に振っている。建物の規模は桁行が6.2mと6.8m、梁行が7.1m、面積約46m²をはかる。柱間は桁行が2.1～2.3m、梁行が2.3mである。廂の柱列は身舎から東と西へ1.3m離れている。柱穴の形態は円形あるいは隅丸方形である。柱穴の規模は径0.3～0.4m、深さ0.4m前後をはかる。本建物の西廂の柱列は溝980274を切っており、建物980003より後出になろう。

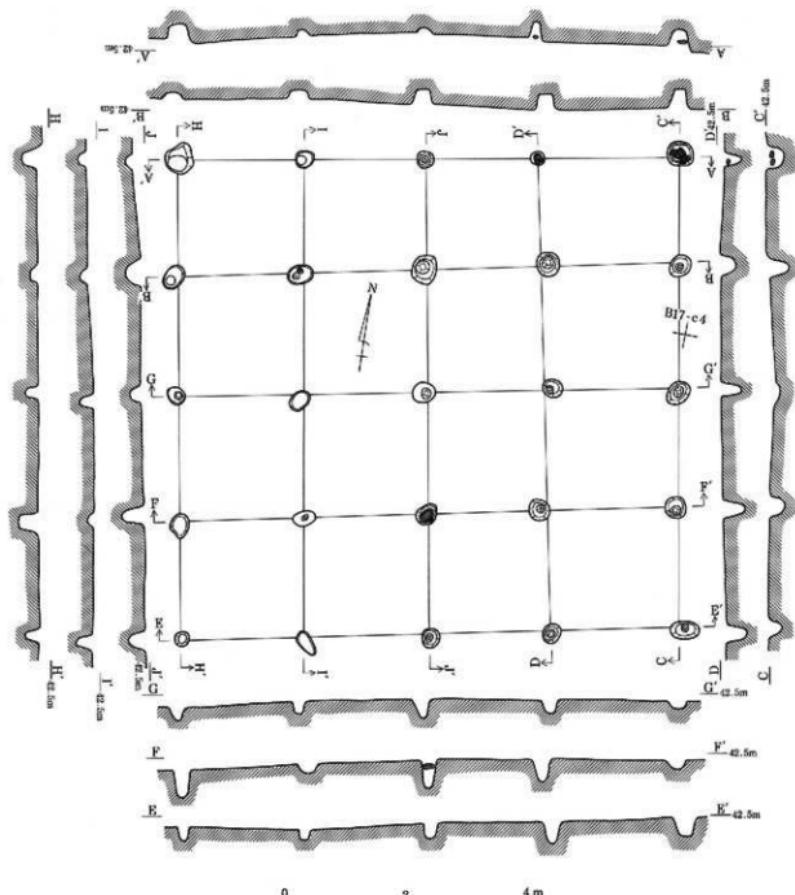


fig.17 掘立柱建物985010平面図・断面図 (S=1/80)

⑤掘立柱建物985005 (fig.16) A調査区の北西部、B17-b10付近で検出された。本建物は桁行3間、梁行2間の南北棟である。建物主軸はN5°Wで、やや西に振っている。建物の規模は桁行6.5m、梁行4.5m、面積約29m²をはかる。柱間は桁行が2.1~2.2m、梁行が2.2mをはかる。柱穴の形態は円形あるいは隅丸方形であり、その規模は径0.3~0.4m、深さ0.2~0.3mをはかる。数ヶ所の柱穴には、柱の長さを調節するための平坦な河原石が入れられていた。本建物の時期は、周辺の遺構から13世紀前～中葉頃と考えられる。

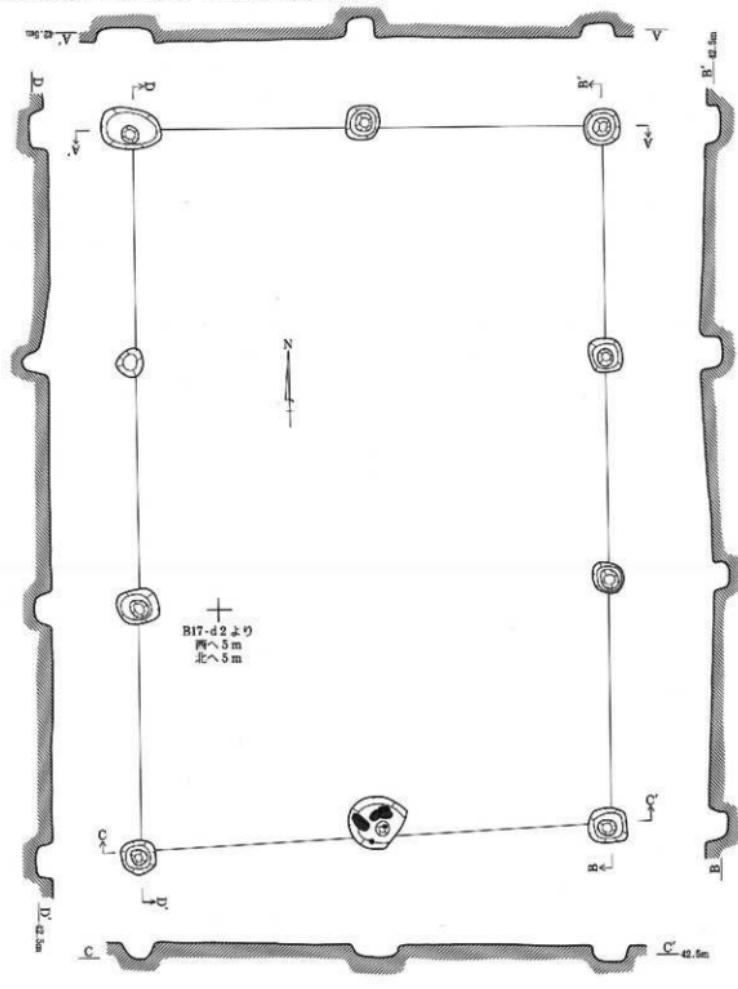
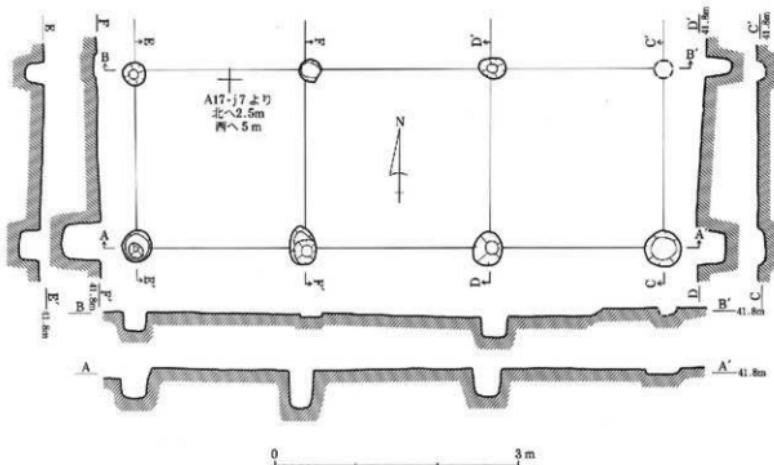


fig. 18 掘立柱建物985012平面図・断面図 (S = 1/40)

⑥掘立柱建物985009 (fig. 19) A調査区の北端、A17-j7付近で検出された。桁行3間、梁行2間以上の建物である。建物は調査区外にも及んでいるため、その全容は明確ではない。基本的には2間×3間の総柱建物で東西棟と考えられる。建物主軸はN97°Wをはかる。現状での建物の規模は桁行6.5m、梁行2.2m以上、柱間は桁行が2.1~2.3m、梁行が2.2mをはかる。柱穴の形態は円形であり、比較的隅柱の柱穴は大きい。柱穴の規模は径0.3~0.4m、深さ0.3~0.5mをはかる。なお、梁行の西2列目付近に井戸980140が検出されている。建物980009と井戸980140とは、切り合い関係はなく共存もしないであろうが、井戸980140の底面から12世紀前葉頃の瓦器碗1点 (fig.29-1) がほぼ完形で出土している。また、他の建物群からも離れ単独で立地し、建物主軸も若干異なることなどを勘案すれば、本建物の時期は、12世紀に遡る可能性が高い。

⑦掘立柱建物985010 (fig. 17) B調査区の中央部西南寄り、B17-c4付近で単独で検出された。桁行4間、梁行4間の総柱の大型建物で東西棟である。建物主軸は、N9°Wとかなり西に振っている。建物の規模は桁行8.2m、梁行7.9m、面積約65m²をはかる。柱間は桁行が2.1m、梁行が2mをはかる。各柱列の4ヶ所以上の柱穴には、拳大の河原石が柱の長さを調節するために入れられていた。また、各柱穴の形態は円形で隅柱の柱穴はやや大きくて深い。柱穴の規模は径0.3~0.4m、深さ0.2~0.45mをはかる。当初、本建物について総柱であり平面も正方形に近いという理由などから、漫然と鉄造関係の原料や道具を入れる倉庫の機能を推定したが、他の建物の状況を勘案すれば、単純にそうとは言い切れない。なお、本建物内の東南部で浅い長方形の土坑が検出されているが、関連するものかどうかはわからない。本建物の時期は、周辺の遺構から考えると、13世紀前葉頃と考えられる。



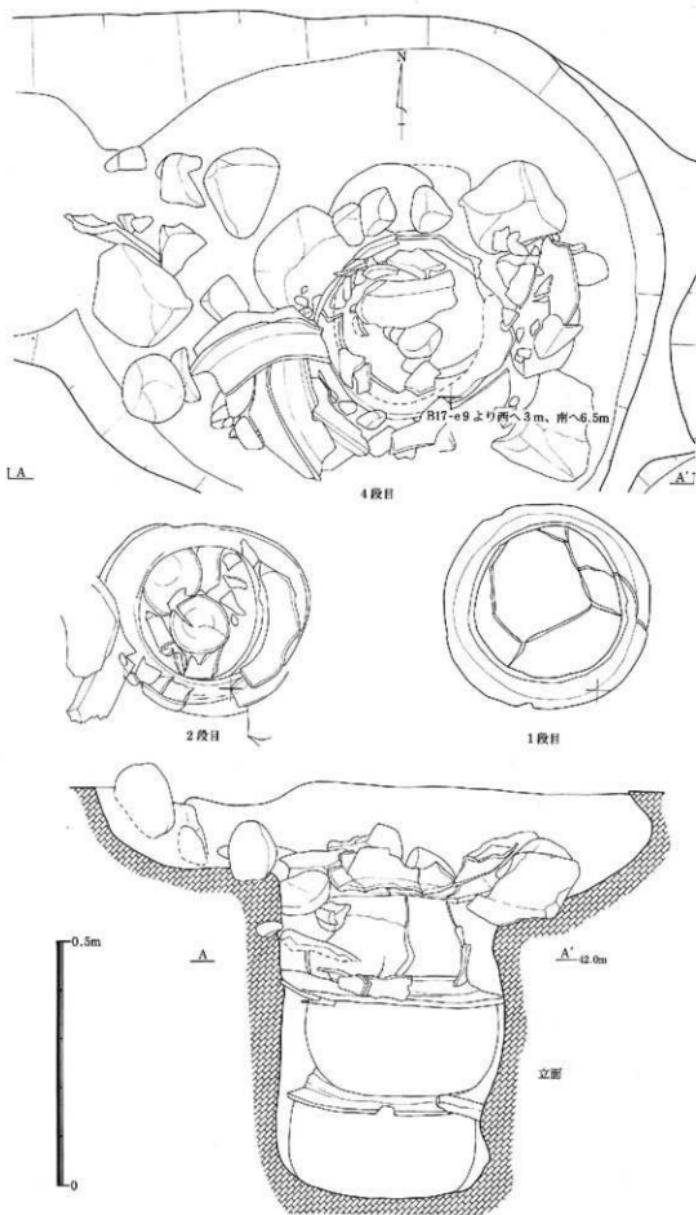


fig. 20 井戸980139平面図・立面図 (S=1/10)

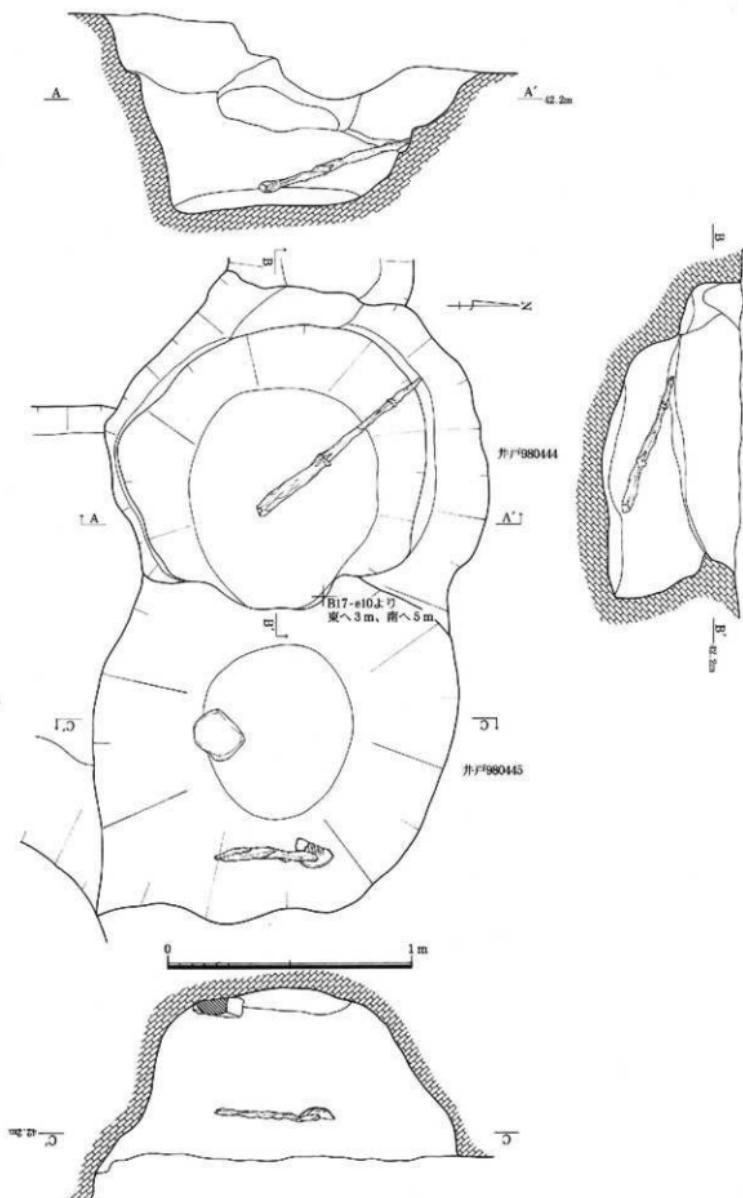


fig. 21 井戸980444及び井戸980445平面図・立面図 (S=1/20)

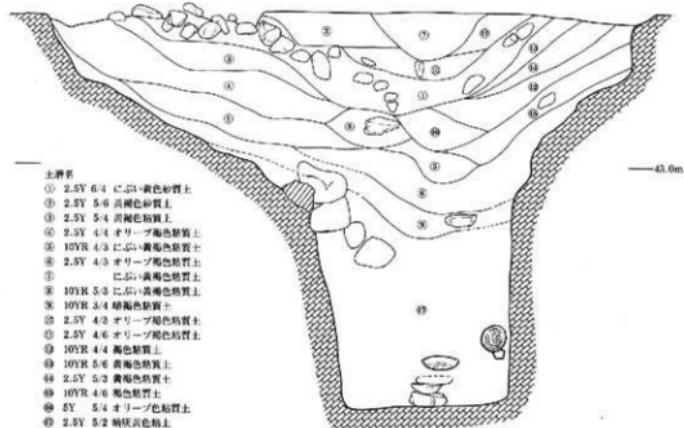
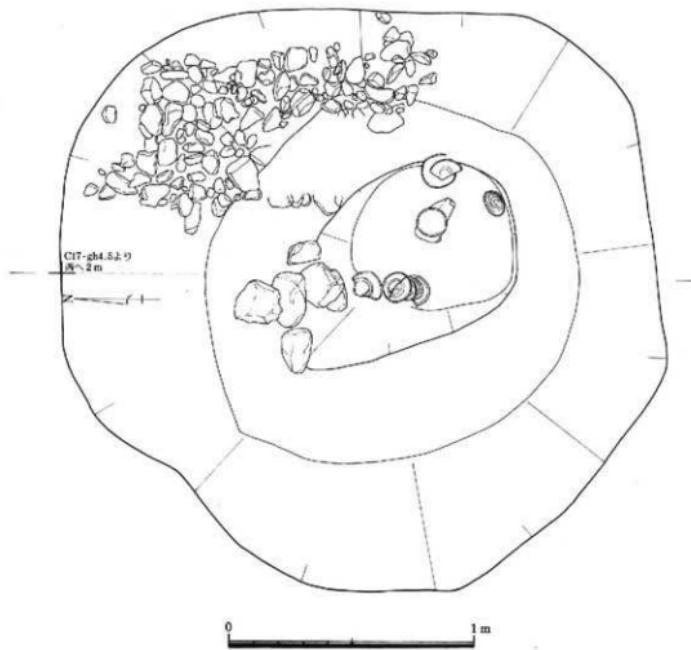
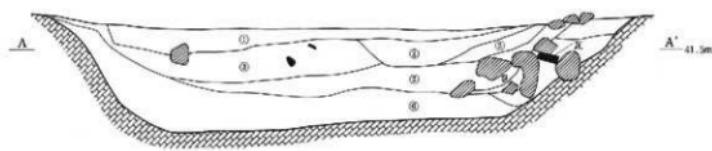
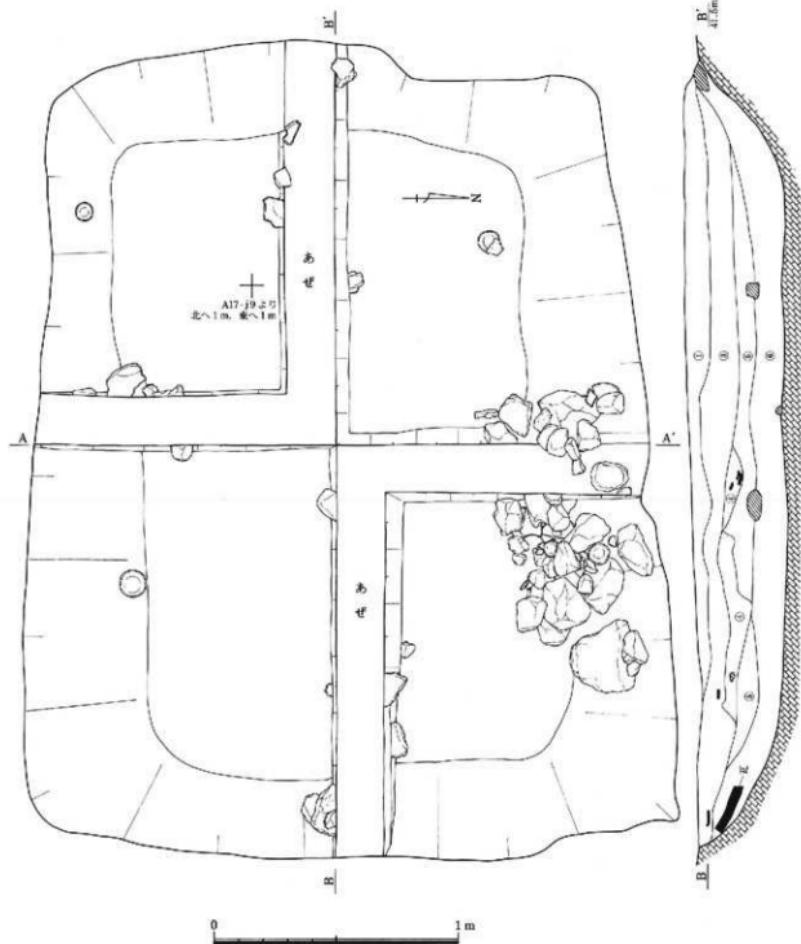


fig. 22 井戸981350平面図・断面図 (S = 1/20)



土壤名 ① 7.5Y 8/2 灰白色砂質土 (炭化物を多く含む)
 ② 5Y 7/1 灰白-10YR 6/3 明黄褐色砂質土
 ③ 5Y 6/2 灰褐色の粘質土
 ④ 2.5Y 7/1 灰白色砂質土
 ⑤ 7.5Y 6/1 灰色黏土
 ⑥ 7.5Y 4/1 灰色黏土

fig. 23 土坑980005平面図・断面図 (S=1/20)

⑥掘立柱建物985012 (fig.18) B調査区の東南部寄り、B17-d2付近で検出された。桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。建物主軸はほぼ真北を示している。建物の規模は桁行5.7~5.9m、梁行3.9m、面積23m²をはかる。柱間は桁行が1.8~2.1m、梁行が1.9mをはかる。なお、南梁行柱列の中央柱穴には、拳大の河原石が数点、柱を安定させるために入れられていた。なお、各柱穴の形態は円形もしくは隅丸方形である。柱穴の規模は径0.3~0.5m、深さ0.2mをはかる。本建物の時期は、周辺の遺構から考えると、13世紀前葉頃と考えられる。

(2) 井戸

- ①井戸980139 (fig.20,31) A調査区の西南端部、B17-e9付近で検出された。この付近には、西から980444、980445、980177、980139と4基の井戸が連接して営まれている。水みちが集中しているのであろうか。また、これららの井戸はその位置関係から建物985008に関連するものと考えられよう。井戸980139は、土釜の底を打ち抜き、4段に重ねて井戸枠にしたものである。井戸の掘形は南側の一部を昨年度の調査区によって削平されているが、平面は梢円形を呈し2段に掘削されていた。掘方は、土釜の鍔が辛うじて据え付けられる程度のぎりぎりに掘り込まれていた。掘方の規模は上段が東西1.2m・南北1.1m、下段が0.5m、深さ0.85mであり、底面のレベルは41.5mをはかる。なお、井戸枠である土釜は一段目から三段目までは正位の状態で据えられていたが、4段目は逆位になっていた。また、4段目の土釜の周囲には人頭大の河原石が巻かれていた。これは、取水口付近と考えられる逆位の土釜の支石及び人間が立つステップとしての機能を有していたの

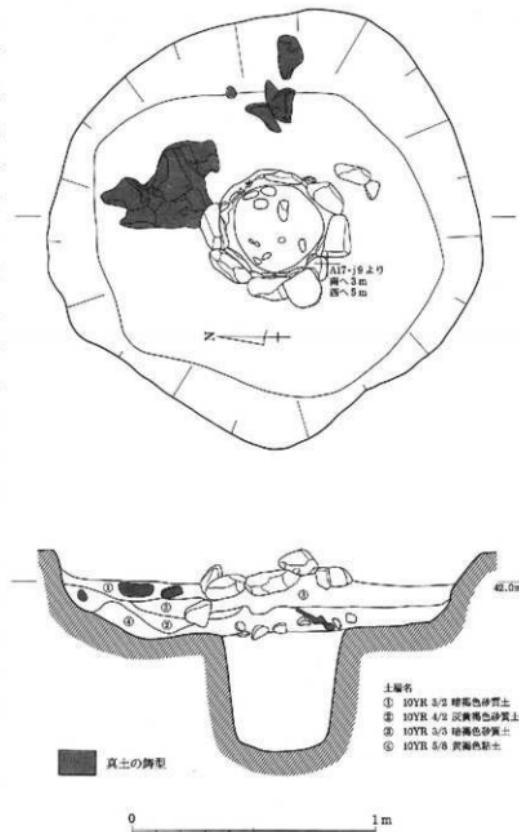


fig. 24 土坑980011平面図・断面図 (S=1/20)

であろう。井戸の底面には、0.05m内外の小砾が敷かれ、その上部に完形の瓦器碗が2点正位の状態で置かれていた。これらの土器は、井戸をこぼつ際の祭りの痕跡であろう。なお、井戸枠に利用されていた土釜は、すべて使用済みのものであり、底部から鉢付近にかけては明瞭に煤が付着していた。また、4つの土釜（fig.30-1・3, 31-1・2）はすべて土師質であり、ほぼ同形同大であった。井戸を構築するにあたって、一挙に使用されたものと考えられる。ただ、4段目の周囲から出土した瓦質の土釜（fig.30-2）は、若干時期が下るものと考えられる。それらを勘案すれば、本井戸の時期は13世紀中～後葉頃であろう。

②井戸980444及び井戸980445（fig.21） A調査区の西南端、上述した井戸980139の西へ2mのところで検出された。二つの井戸が同時に存在したのではなく、井戸980445を井戸980444が切り込んでいる。二つの井戸掘方の規模は、各々上面で径1.5m前後であるが、底面のレベルが異なっていた。すなわち、井戸980444が41.75m、井戸980445が41.6mをはかり、井戸980445の方が深

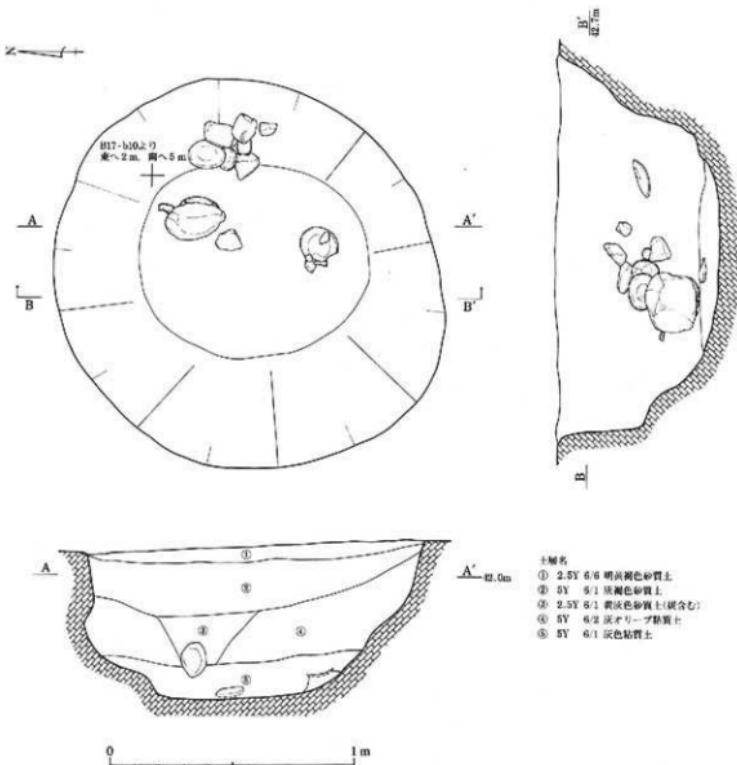


fig.25 土坑980165平面図・断面図・立面図 (S=1/20)

い。井戸底面はほぼフラットであり、井戸枠などは遺存していなかった。抜かれたのであろうか。ただ、井戸980444の内部には径0.05m、長さ0.9mの杭が一本遺存していた。さらに、井戸980445の底面には一辺約0.2mの平坦な河原石が一石据えられ、東肩には長さ0.4mの杭の下に瓦器挽1点が置かれていた。井戸をこぼつ際の遺物であろう。これらから、井戸980445の時期は13世紀前葉頃と考えられる。

③井戸981350 (fig. 22) C3調査区の西南部C17-g4付近で検出された。この付近には、井戸980139付近同様、981355、981350、981359と3基の井戸が連絡して営まれていた。水みちが関係するのであろう。これらの井戸は位置関係から建物985024や建物985023に関連するものと考えられる。

なお掘方の規模は一辺2.5mの隅丸方形で、2段に掘削されていた。深さは1.6mであり底面のレベルは42mをはかる。井戸枠は遺存していなかった。ただ井戸底面には一辺0.2mの平坦な河原石が一石据えられており、その上に瓦器挽1点が正位の状態で置かれていた。井戸をこぼつ際の遺物であろう。この他にも底面近くで7点以上の瓦器挽が出土している。また、本井戸の土層断面をみると、一気に埋められた状況であり、掘方上面は多量の河原石によって整地されていた。本井戸の時期は13世紀後葉頃と考えられる。

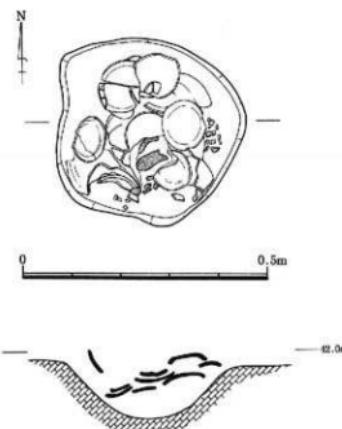


fig. 26 土坑980001平面図・断面図 (S=1/10)

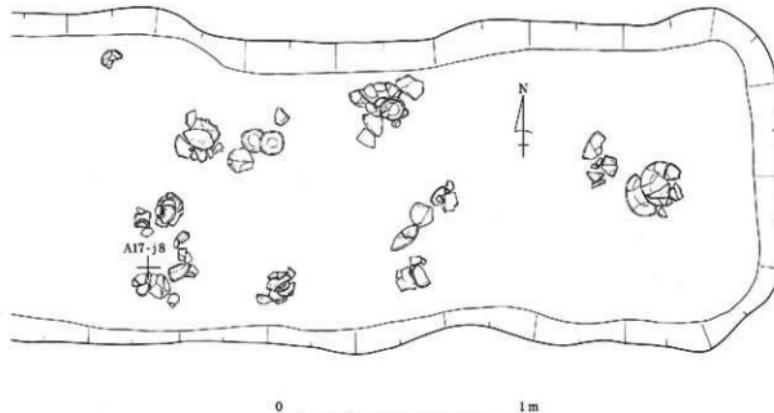


fig. 27 溝980017遺物出土状況図 (S=1/20)

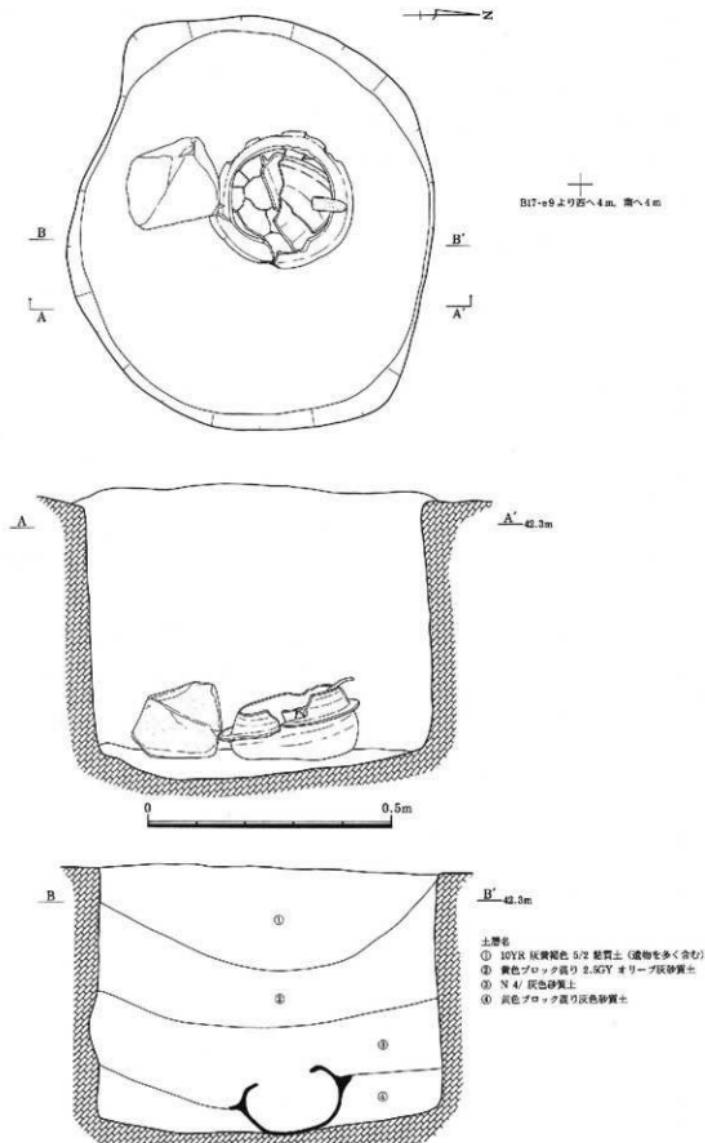


fig. 28 土坑980201平面図・立面図・断面図 (S=1/10)

(3) 土坑

①土坑980005 (fig. 22,34) A調査区の北西端部、A17-j9付近で検出された。この土坑は、位置関係から建物985001及び建物985002に関連するものと考えられる。土坑980005の掘形は平面的には東西に長い長方形を呈し、断面は緩やかな逆台形になっている。掘方の規模は、上面が東西3.4m・南北2.5m、下面が東西2.6m・南北1.8mをはかり、ほぼ4:3の割合で掘削されている。土坑の底面までの深さは0.4m前後、レベルは41.15mはかる。土坑の底面には、柱穴などはまったく検出されず、フラットな状況であった。ただ、北側の河原石などが集中している北壁付近は火を受け、赤変していた。また、土坑埋土には炭や焼土が混じり、瓦器などの遺物 (fig. 34) も比較的まとまって出土した。その中には、鉄鍋などの真土鑄型片 (表紙カット) が含まれており、明らかに鋳造に関連した土坑と考えられる。ただ、どういう作業をしていたかはわからない。本土坑の時期は、出土遺物から13世紀前葉頃と考えられる。

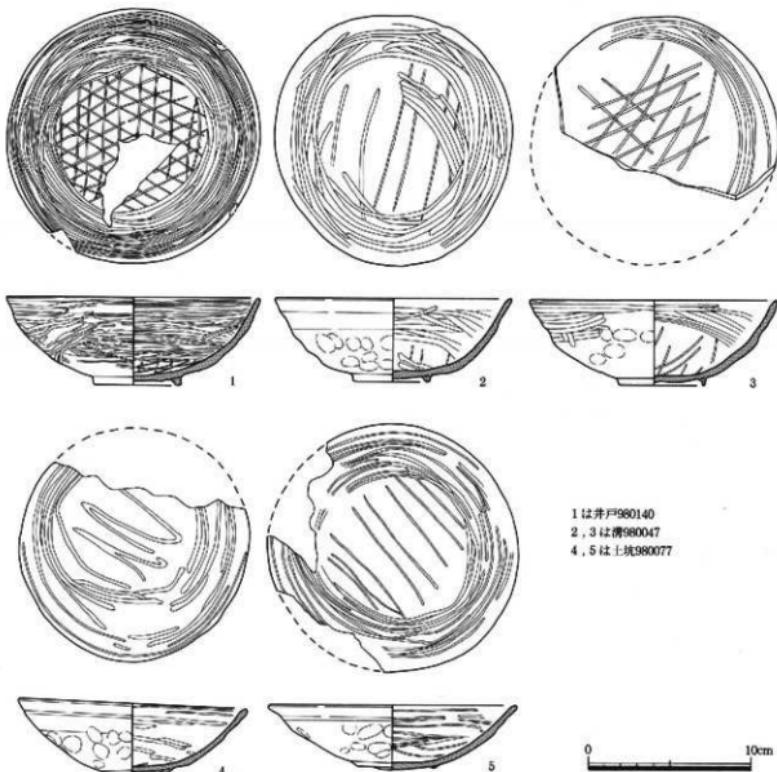


fig. 29 井戸980140他出土遺物 (S=1/3)

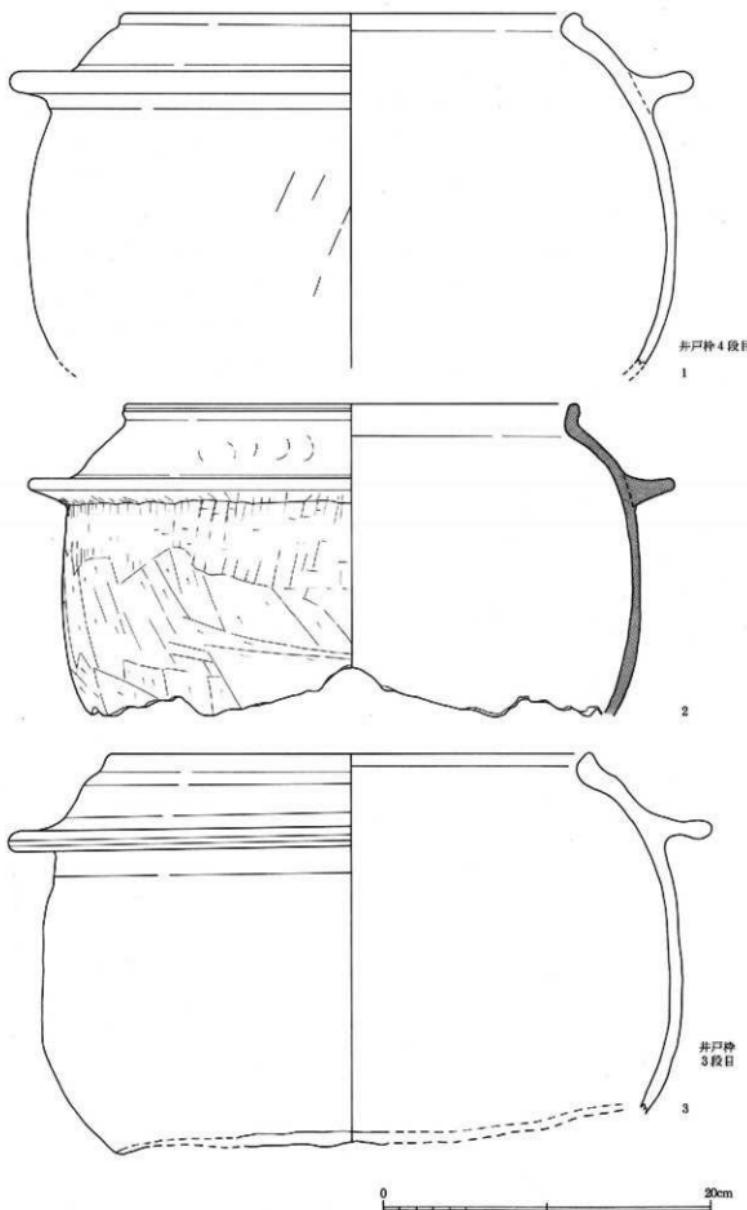


fig. 30 井戸980139出土遺物① (S = 1/3)

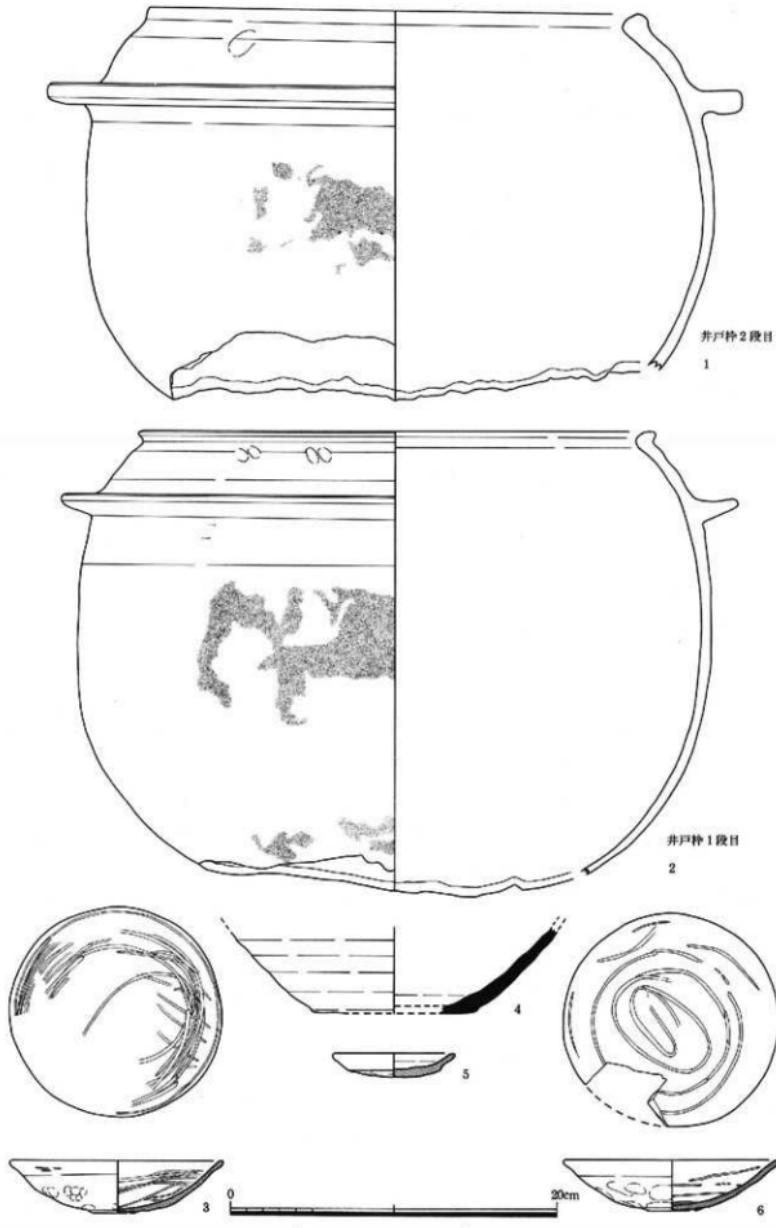


fig. 31 井戸980139出土遺物② (S=1/3)

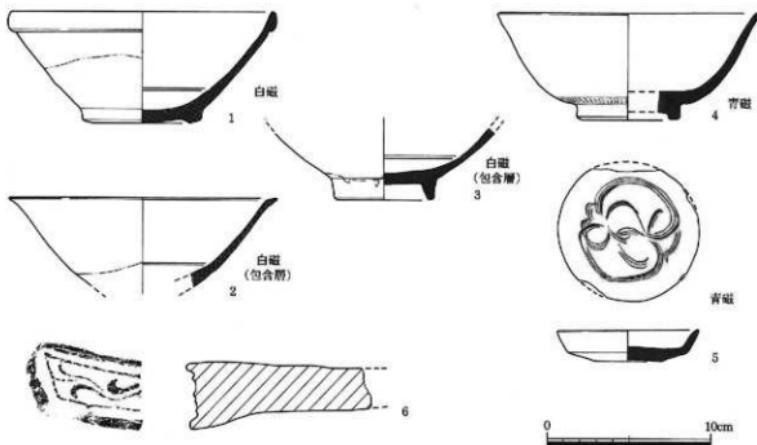


fig. 32 井戸980004他出土遺物 (S = 1/3)

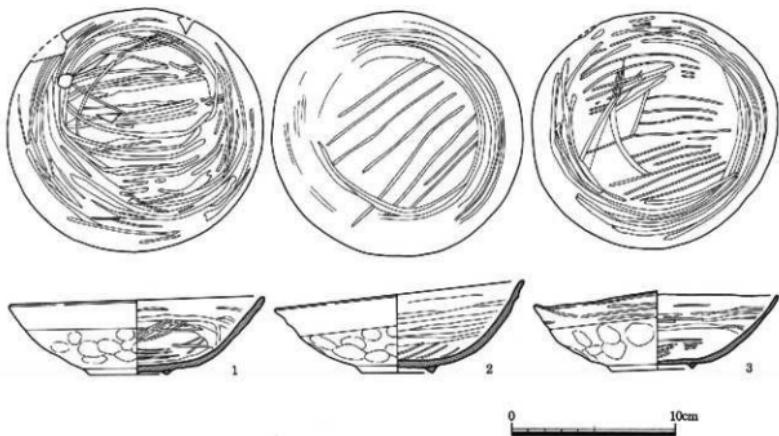


fig. 33 土坑980165出土遺物 (S = 1/3)

②土坑980011 (fig. 24) A調査区の北西部、A17-j9付近で検出された。大型建物985002によって掘方の一部が切られてい。この土坑は、位置関係から建物985003～985005に関連するものと考えられる。土坑980011の掘形は円形であり、断面は2段に掘り込まれていた。井戸の掘方に近似している。掘方の規模は上段が径1.7m、下段が径0.5m、深さは0.9mであり、底面のレベルは41.3mをはかる。なお、土坑のほぼ中央の上段部分には0.2m前後の河原石や粘土を円形に組んだ施設があった。ただ、石組内部からは全く遺物が出土せず、精良な砂が充填されていただけで

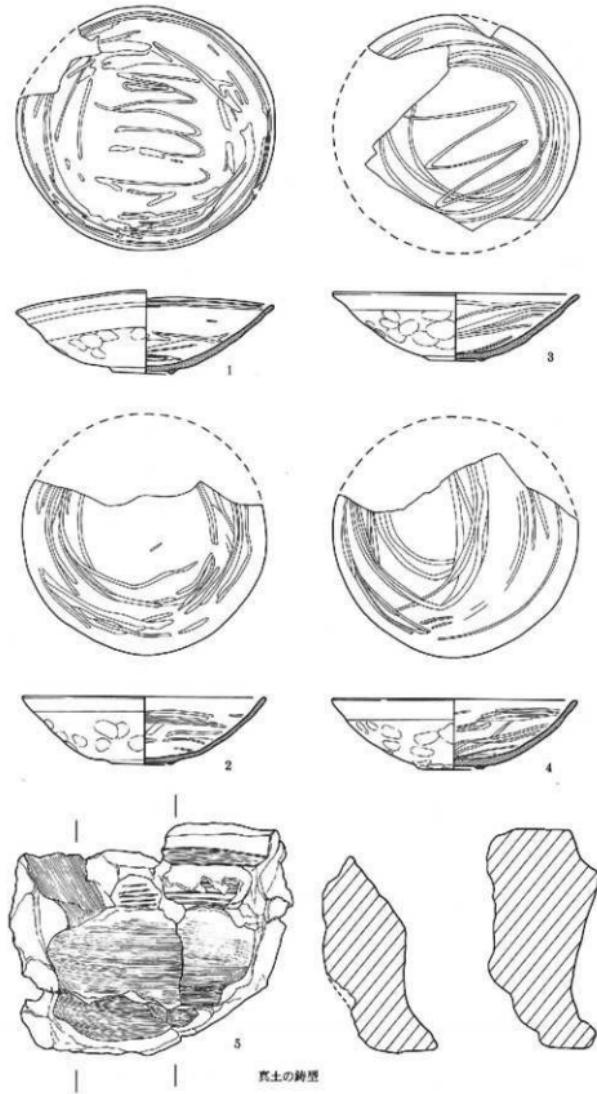


fig. 34 土坑980005出土遺物 ($S = 1/3$)

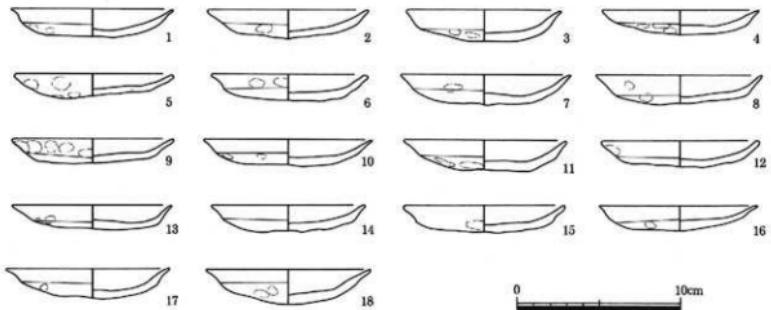


fig. 35 土坑980001出土遺物 (S=1/3)

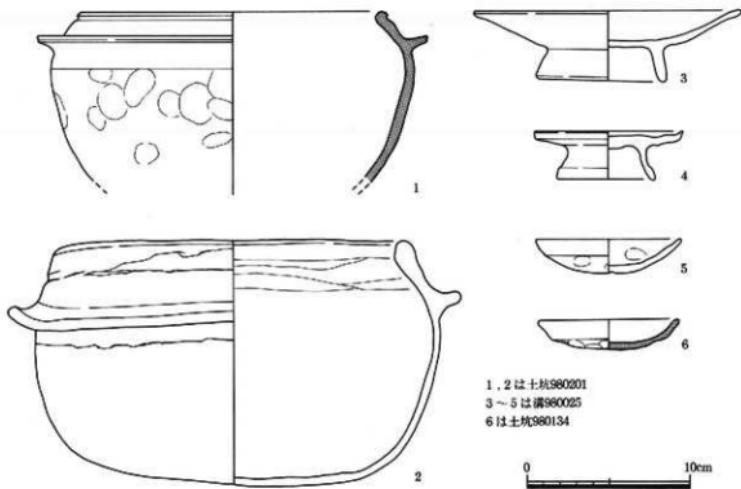


fig. 36 土坑980201他出土遺物 (S=1/3)

あった。さらに、石組の周囲からは焼けた粘土や炭が出土し、鐵鍋などに使う大きな真土鑄型も出土している。本土坑については、検出時にその形態や埋土から鑄造関連のものとは考えず、井戸のように掘削してしまった。元来、土坑980011は井戸980139のような土釜井戸として掘削されたのであろう。土坑底面の埋土には、井戸によくみられる青灰色系砂質シルトが一部堆積していた。ただ、何らかの理由で井戸の機能を停止した後、その上段部に石や粘土を内法径約0.35mの円形になるように組み、その内部には鑄物砂を入れ、鑄型を据え付けたのではなかろうか。丁度、出土した鑄型から復元しうる鐵鍋の法量は、内法径0.35mの石組の中におさまる。あながち荒唐

無稽な想定ではないであろう。なお、本土坑の時期は、周辺の遺構の状況から13世紀前葉頃と考えられる。

③土坑980165 (fig.25,33) A調査区の西中央部、B17-b10付近で検出された。建物985003の西南端から西へ2mに位置する。なお、本土坑は井戸の可能性もある。土坑980165の掘形は平面正円であり、断面はU字形に掘り込まれていた。掘方の規模は径1.7m、深さ0.6mをはかり、底面のレベルは41.5mをはかる。また、土坑の中央部東寄りには、人頭大の河原石や完形の瓦器椀 (fig.33) 3点が置かれていた。土坑をこぼつ際の遺物であろうか。なお、本土坑の時期は、出土遺物から12世紀末～13世紀初頭頃と考えられる。

④土坑980001 (fig.26,35) A調査区の北西端部、A17-j10付近で検出された。その位置関係から建物985001に対する地鎮のための土坑と考えられる。本土坑の掘形は、平面隅丸方形であり、断面は皿形を呈している。掘方の規模は一辺及び径0.4m、深さ0.15mであり、底面のレベルは41.85mをはかる。土坑内には、径10cm前後の完形の土師質小皿 (fig.35) を18枚以上、ほぼ3段に重ねて埋納していた。また、最上段の土師質小皿の内面には、炭や灰が遺存していた。何かを燃やしたのであろう。このような地鎮に伴う土坑は、他に土坑980003・980041・980216などがある。なお、本土坑の時期は、出土遺物から13世紀前葉頃と考えられる。

⑤土坑980201 (fig.28, 36) A調査区の西南部、B17-e9付近で検出された。井戸980139の北側1mに位置する。本土坑は、土壤墓の可能性が高い。本土坑の掘形は隅丸方形であり、断面形態は箱形を呈する。掘方の規模は一辺0.7～0.85m、深さ0.6mをはかり、底面のレベルは41.8mをはかる。土坑中央部の底面には完形の土師質土釜が据えられ、その南側には方形の人頭大の河原石が一石、土釜を安定させるために据えられていた。また、土師質土釜内には瓦質土釜の破片が2つに割られて入っていた。さらに、土師質土釜の北口縁部上面には石さじが横方向に載せられていた。おそらく、瓦質の土釜片は土師質土釜の蓋であり、石さじは蓋の安定のために突っ込まれたものであろう。出土状況から考えると、土釜を蔵骨器として利用した可能性が高い。なお土坑の時期は、本調査区で最も新しく、出土遺物から13世紀末～14世紀初頭頃と考えられる。

(4) 溝

溝980017 (fig.27,29) A調査区の北西端部、A17-j8付近で検出された。本溝は、出土遺物の検討を要するが、溝980047に切られている。本溝の規模は幅1.2m、長さ2.5m以上、深さ0.4mをはかり、その断面はU字形に掘り凹められていた。埋土内より、ほぼ完形の瓦器椀や土師質小皿などが多量に出土した。また、溝980047も同様な状態であった。すなわち、溝内には完形に近い瓦器椀などが一気に廃棄されていたのである。おそらく、鋳造品の完成や建物の棟上げの際の饗宴などに使用されたものと考えられる。本溝の時期は、出土遺物から12世紀後葉頃と考えられる。

第5章 まとめ

余部という地名は、おそらく余戸に由来するものであろう。鎌倉時代の河内西琳寺の文永注記（1264～1275）によれば、天平15年帳（743）に僧智藏の出自について「河内国丹比郡余戸郷余戸主依（羅カ）古渡男広岡」というのがみえ、初出であろう。また、余戸の意味は、『新版角川日本史辞典』によれば、「律令制下の里の特例であり、特別な行政的措置によって生じた最末端の行政単位である。戸令では50戸一里を構成することになっているが、一村のうち超過分の50戸未満を余戸里としたか、もしくは、僻地の50戸未満の村を余戸里としたという説がある。」という。ただ、近世から繼承されてきた余部村の領域は、北と南に分かれるほど巨大であり、僻地というのは如何であろうか。

さて、前章まで、平成10年度の余部遺跡（その2）の調査成果の一部を概観してきたが、ここでは調査で検出された主要な遺構、遺物について時代毎の簡単な見通しを述べておきたい。

古墳～飛鳥・奈良時代

古墳時代の畑遺構の検出は、水田遺構に比べると極端に少ない。群馬県や鹿児島県では、榛名山や浅間山、あるいは聞聞岳の噴火による火山灰の直下から畑跡が検出されている。特に、群馬県下では古墳時代の畑跡が20数例（黒井峯遺跡・熊野堂遺跡・有馬遺跡など）発見されている。ただ、近畿地方では堺市南花田遺跡や八尾市美園遺跡などで小規模に検出されているにすぎない。今年度、A調査区で検出された古墳時代後期～飛鳥時代にかけての畑は、同時代の集落と近接して検出されたことに意味がある。なお、栽培種は分析の結果不明となったが、『魏志倭人伝』に「禾稻紵麻を種う」という記事や、『日本書記』神代紀にも稲の他に粟、稗、麦、大豆、小豆などの穀類伝承記事がみられることから、穀物類を中心とした作物が栽培されていたのは確実であろう。本調査区から南へ3.5kmに位置する大規模な「狹山池」が開削されたのは、木桶の年輪年代から飛鳥時代（7世紀初頭）という。暴れ川であった古天野川を制御するため、狹山池は掘削され、北へ向かって旧の谷を利用しながら、西除川と東除川の両川が形成された。古代においては、狹山池の掘削や両川の整備が一両日に完成したものではなく、何年いや何十年とかかったであろう。余部遺跡周辺では、6世紀後葉時点での大規模な河川が近くになく、水を引っ張ってくる大規模な溝もみられない。そういう状態では水田を経営できないであろうし、今回検出された畑の造成が精一杯であろう。なお、畑の畝溝群と2棟の掘立柱建物について導かれる当時の景観は、疎らな数棟の建物に居住している人々が天水などを利用しながら、粟や稗、芋、麦などを栽培していたイメージであろう。

次に「わだち」の問題がある。わだちは、畑の畝溝の凹凸がある程度遺存している時に（その部分は沼状であったと思われるが）、牛車などが往来し、印されたものと考えられる。このわだちの軌跡を追えば、B調査区の北西部付近の径約10mの円弧内にはぼおさまる。これは、牛車などがその付近から西及び西南方向に向かって放射状に往来し、荷を積み出したり、降ろしたり、

牛車などを反転した場所とも考えられる。ただ、牛車に何を乗せていたかは明確ではない。

平安～室町時代

中世については、鋳造に関連する遺構（12世紀後葉～14世紀初頭）が、掘立柱建物を中心に展開されている。これらの遺構は、昨年度の調査でも検出されており、鋳造に関連する遺構の範囲がより明確になった。細部をみると、建物（縦柱の東西棟+側柱の南北棟）・井戸・鋳造関係の土坑・溝などが一体となって、各々の鋳造空間を形成している。また、昨年度の調査で検出された南北一辺45mに及ぶ方形の区画溝で囲まれた屋敷地とこれら鋳造関連の集落との関係を解明することは重要であろう。その屋敷地に居住した階層は、大工と呼ばれる鋳造を統括する棟梁なのか、莊園などを管理していた莊官なのかはわからない。鋳造関連の遺構・遺物の分析は最重要課題であろう。

本遺跡周辺の太井遺跡、真福寺遺跡などの調査でも鋳造関連の遺構・遺物が多量に出土している。これらの遺構・遺物は、紛れもなく丹南地域を本拠地とした河内鋳物師の活躍場所であった。彼らは、当初卓越した鋳造技術をもって、梵鐘・灯炉・仏像・仏具などの寺院関連の銅製品を鋳造していたと考えられるが、その萌芽はすでに太井遺跡で検出された8世紀前葉の堅穴などにみられる。堅穴からは、取瓶や壇壗、轆の羽口などがまとまって出土し、明らかに銅を鋳造していたことが理解しうる。特に、当地周辺は、和銅元年（708）に催鉄司の長官に任命された多治比真人三宅麻呂の本貫地であった。実際、周防の銅山で産出される銅鉱石によって、現地の「官営工房」で銅開拓などは鋳造されたと考えられるが、それ以外にも銅鉱石などの原料を搬入し、それらを小規模な範囲で加工した場所が太井遺跡の堅穴なのではなかろうか。

中世前期において、本遺跡周辺が大規模な鋳造地帯になったのは、鋳物の出来を左右する精良な砂が採取できたためと考えられている。古代の陶邑古窯跡群を例にとれば、窯を構築するにあたって、緩やかな傾斜地をもつ広範な丘陵地帯を選び、且つ出荷に際しての舟を利用できる川の存在を考え、須恵器の原料となる精良な粘土や窯内部を燃焼する多量の薪などを現地で容易に入手できる場所などの条件が相俟って初めて須恵器生産が実現できたのであり、付け加うるに、各部門における人的体制の整備、管理、統括などの必要性は言うまでもない。おそらく、奈良時代における豪族主導の鋳造技術は、形を変えながらも、当地周辺で中世初頭になって大規模な鋳造地帯として開花していくのである。また、当地周辺は、寺社の所有する大莊園地帯でもあったため、当初寺院などの需要に応じる形で、鋳物師は梵鐘などを鋳造していたものが、藏人所に属して「灯炉供御人」になり、天皇に灯炉や鍋釜などを調進するようになったのである。その後、河内鋳物師は、「藏人所牒」を得て、通行免税などの権益や鋳物の専売権をも獲得し、全国的の展開を遂げる。ただ、それらが庶民の台所で日常使用する鍋釜であったかどうかはわからない。当時の大消費地である京での需要に応じて、150年近くにわたって鋳造品を供給しつづけたのである。しかし、当地での鋳造品の製造は、14世紀前葉に始まる日本全体を巻き込んだ南北朝の大動乱によって終焉をむかえることになるのである。

調査の実施及び本書の作成にあたっては、正岡大実、周藤光代、川原清晃、仲谷昌己、佐藤香世子、高橋綾美、藤井千尋、嶽村沙絵、藤井 晓、戸川拓司、星川尚志、納谷有香子、北村美紀、河本直子、古下佳代子、宇澤ヒデ子、岸田啓子、増川順子、河本美穂、東英美子の諸氏の援助をうけた。また、出土遺物の写真撮影については、阿南辰秀・伊藤慎司両氏の手を煩わした。なお、堀江門也、尾上 実、廣瀬雅信、佐久間貴士、舛本 哲、岡本敏行、地村邦夫、西川寿勝、小浜成、包丁道明、泉谷博幸の諸氏には教示、協力をうけた。記して感謝します。

報告書抄録

ふりがな	あまべいせき(その2)はくつちょうさがいよう-2						
書名	余部遺跡(その2)発掘調査概要・II						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	上林史郎						
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	大阪市中央区大手前2丁目 Tel.06-6941-0351(代)						
発行年月日	1999年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
余部遺跡 (その2)	おおさかふ 大阪府 みみかわちぐん 南河内郡 みはらちよう 美原町 きたあまべ 北余部 80番地外	27385	18	A・B調査区 34° 135° 32' 32' 16" 47" C1~3調査区 34° 135° 32' 32' 11" 48"	1998年 8月1日~ 1999年 3月31日	7000	府営美原北余部住 宅建て替え工事に 伴う発掘調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
余部遺跡 (その2)	集落	古墳時代後期 ~飛鳥時代 奈良時代 平安 鎌倉 室町	塙畠 掘立柱建物 わだち 掘立柱建物 屋敷地 区画溝 井戸、屋敷墓 鋳造土坑 道路	須恵器片 鑄造関連遺物 (鏡型、鉄津、炉壁) 瓦器、土師器、土釜 須恵質土器、陶磁器 木製品	近畿では珍しい塙の 畠溝と掘立柱建物が 検出された。 鎌倉時代を中心とする 掘立柱建物20棟 以上の集落が検出さ れた。掘立柱建物に は鋳造関連遺物との 組み合せが伺える ものがあり、河内銘 物師集団の屋敷地と 作業場の様相が一 層明らかになった。		

PLATE

PL.1
遺構①



A調査区全景
(南から)



A調査区全景
(東から)



A調査区
遺構群
(北から)

PL.2
遺構②

B調査区全景
(南から)



B調査区
建物985013
(南から)

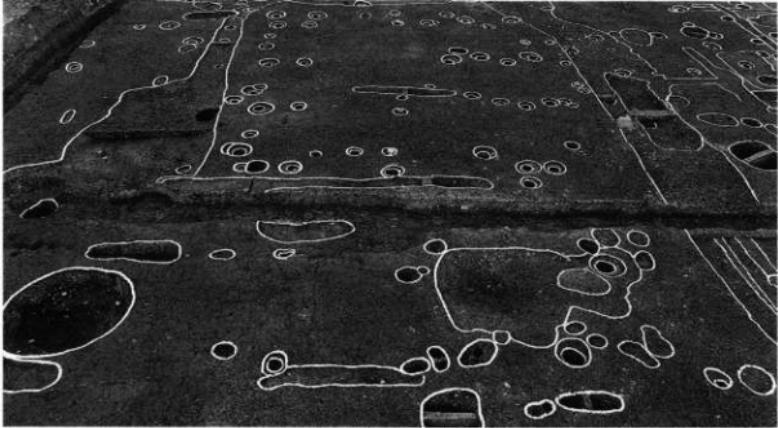


B調査区
建物985011
(西から)

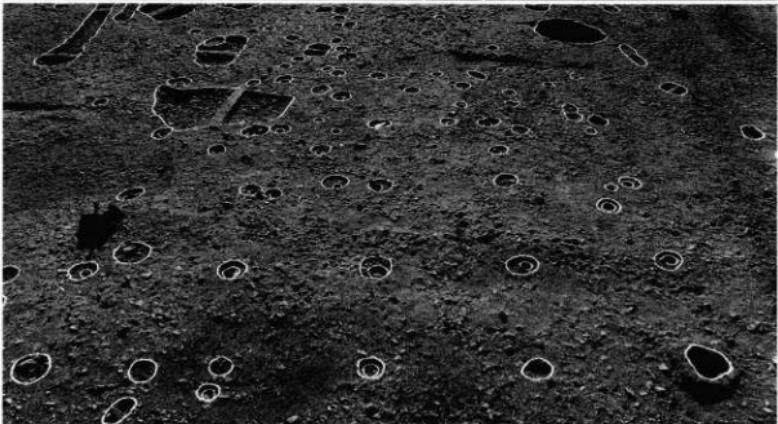


PL.3
遺構③

A調査区
建物985003
985004
985005
(南から)



B調査区
建物985010
(北から)



C1調査区
区画する溝
溝981001
981004
(西から)



PL.4
遺構④



A調査区
井戸980140
(南から)



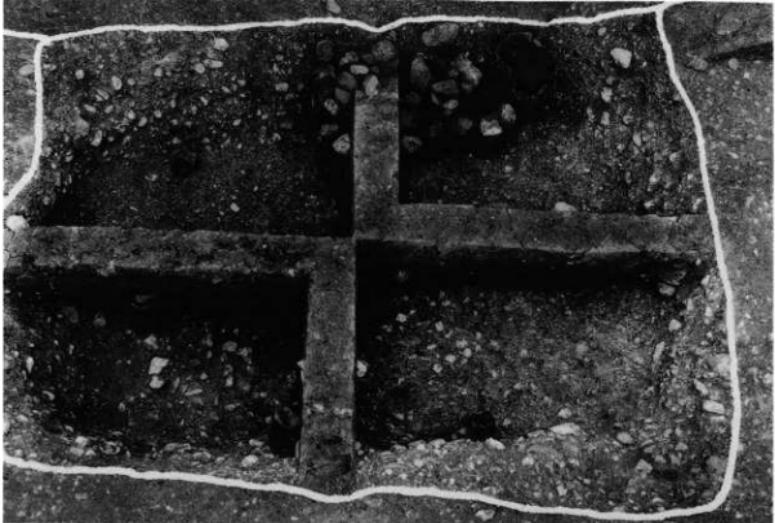
A調査区
井戸980139
(南から)



A調査区
井戸980139
二段目
(南から)



PL.6
遺構⑥



A調査区
土坑980005
(南から)



A調査区
土坑980001
(東から)



A調査区
土坑980011
(南から)



A調査区
溝980017
(西から)



A調査区
土坑980201
(西から)



A調査区
井戸980004
上面の青磁小皿
(北から)



30-2



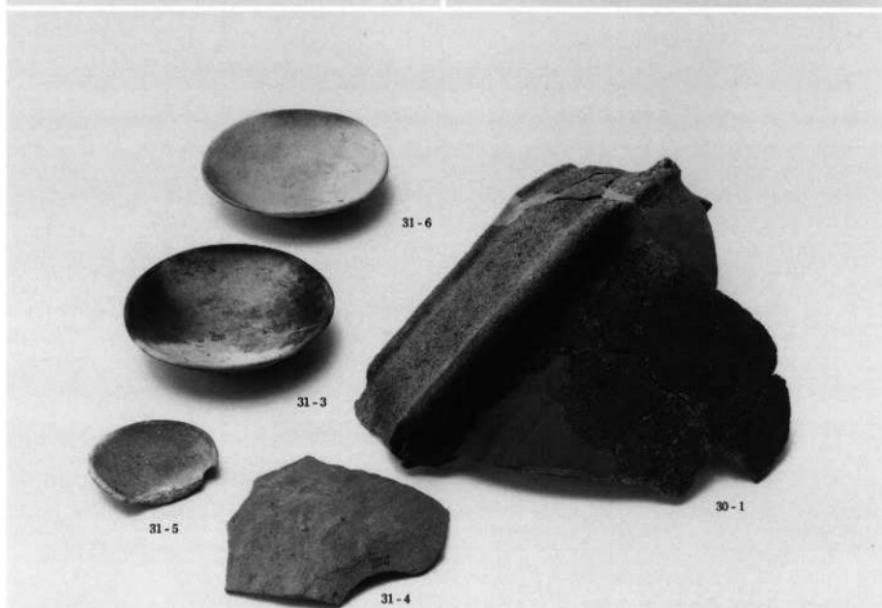
31-2

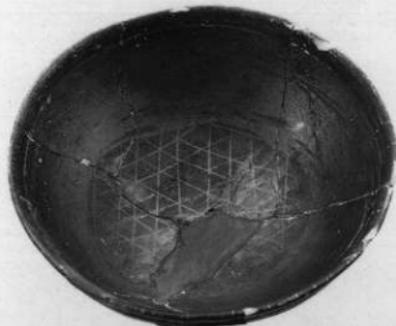


31-1



30-3





I



29-1



36-1



36-2



34-4



29-5



34-2



29-4



34-3

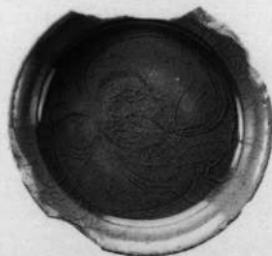


34-6

29-1は井戸980140
34は土坑980005
29-4,29-5は
土坑980077
36-6は土坑980134



33-2



33-3



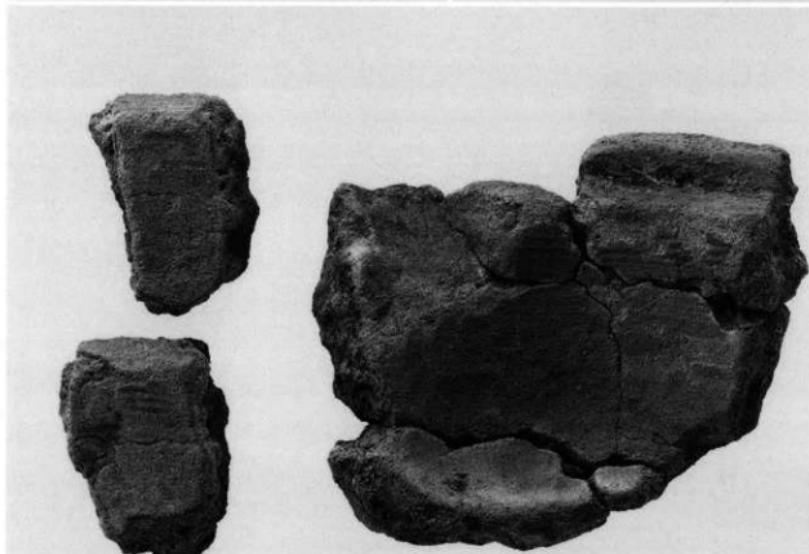
33-5



33-1



32-1



34-5

